西南学院大学　国際文化論集　第38巻　第２号　49－93頁　2024年３月

泰緬鉄道と筑豊炭鉱とオランダ人考古学者

── 日本軍捕虜時代の H. R. van Heekeren 博士の足跡 ──

伊　藤　慎　二

はじめに

アジア・太平洋戦争は，多くの考古学者の研究と人生を翻弄した。そのなかには，自由を剝奪され，生命に危機がせまる状況でも，調査研究をつづけた研究者がいた。

オランダ人の考古学者 Hendrik Robert van Heekeren（ヘンドリク＝ロベルト＝ファン＝ヘーケレン）博士（図１）は，戦後のインドネシア先史考古学の体系化とタイ先史考古学の本格化に貢献した世界的に著名な考古学者である。しかし，van Heekeren は，アジア・太平洋戦争の際に，オランダ植民地のインドネシア（オランダ領東インド＝蘭印）で，日本帝国軍（以下，日本軍と略す）の捕虜（俘虜）となり，タイ王国と福岡県で強制労働に従事させられた。その足跡を以下にたどり，日本に関係するアジア・太平洋戦争期の重要な考古学史という観点から，その極限状況下の学術研究の営みと意義を考える。

１．Hendrik Robert van Heekeren 博士の生涯と研究

van Heekeren の生涯と研究業績については，van Heekeren の元指導学生でインドネシア共和国独立後の考古学研究を主導した Raden Pandji Soejono と，生前に交流が深かったロンドン大学の東南アジア考古学者 Ian Carvel Glover による追悼文（Soejono 1976，Glover 1974）が詳しいので，おもにそれらを基にま

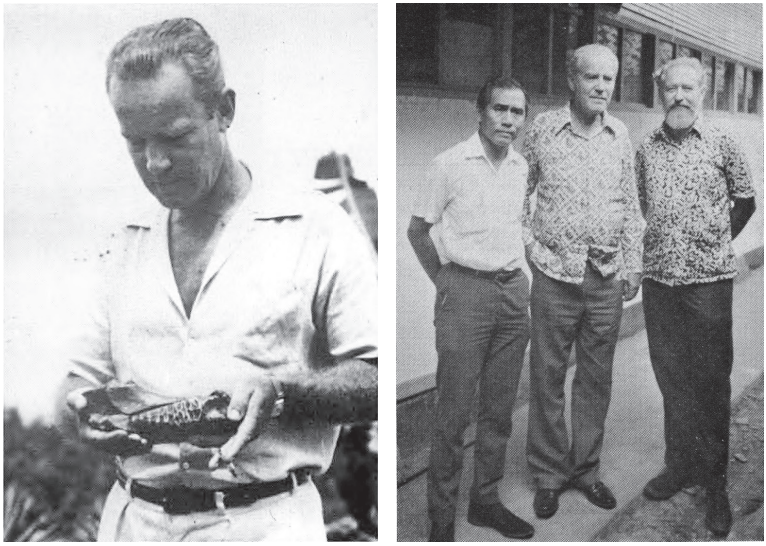


図１　H. R. van Heekeren 博士
左：1947年頃　出典（Bartstra　1997：30頁 fig. 2），右：友人の東南アジア考古学者と晩年の姿（中央）左 R. P. Soejono・右 W. G. Solheim II　出典：（Soejono 1976）

とめる。

親しい友人たちから後に「Oom Bob（ボブおじさん）」と呼ばれた van Heekeren は，オランダ植民地時代のインドネシア中部ジャワ州スマラン（Kutha Semarang）で1902年６月23日に生まれた。その後，オランダで教育を受けてから1926年にジャワ島に戻り，東ジャワ州ジェンベル（Jember）のタバコ農園に勤めた。そして，1928年にヒンドゥー・ジャワ文化の遺跡を訪れたことがきっかけとなり，生涯にわたるインドネシア考古学の探究に目覚めた。休暇を利用しては，インドネシア先史考古学の先駆者である Pieter Vincent van Stein Callenfels やオランダ領東インド政府考古局（Oudheidkundige Dienst）に属する W. J. A. Willems などの影響や指導を受けて専門的に考古学を学んだ。1931年には，考古学に関する最初の学術論文として，ジャワ島東端部ベスキ（Besuki）地方の巨石記念物に関する調査報告を発表した。1939年のヨーロッパ滞在の際はオランダやイ

ギリスで発掘調査に参加したが，第二次世界大戦勃発により急遽インドネシア・ジェンベルの農園に戻ることを余儀なくされた。そして，そのジェンベルからほど近いケンデン＝レンブ（Kendeng Lembu）の農園で，インドネシア初の新石器時代集落遺跡解明を目的とする体系的な発掘調査に着手した。ところが，今度はアジア・太平洋戦争が勃発したことで開始間もない調査は中断となった。日本軍のインドネシア占領時代にその出土遺物と調査記録類も破壊され失われた（van Heekeren 1972：173頁）[1]。さらに，van Heekeren 自身も日本軍の捕虜となり，1943年にタイの泰緬鉄道建設現場，そして1944年には福岡県の筑豊炭鉱に移送されて，強制労働に従事したのである。この日本軍捕虜時代については後述する。

1945年に日本軍の捕虜状態から解放された後，フィリピンを経てオランダ軍に再招集され，インドネシアのスラウェシ島に帰還した。そして，インドネシア独立革命を経てインドネシア共和国独立後は，首都ジャカルタのインドネシア政府考古局（Dinas Purbakala）と国立博物館の先史考古学部門に専属する先史考古学者・学芸員となり，独立初期の考古学調査研究基盤の整備に貢献し，私財も拠出しながらインドネシア人研究者の育成に尽力した。

van Heekeren のインドネシアにおける戦前戦後の主要な調査研究成果としては，以下のような事例があげられる。旧石器時代・中石器時代関係では，ジャワ島中南部の旧石器時代前期パチタン（Pacitan・Patjitan）文化の石器群や絶滅生物化石の研究，フローレス島における洞穴遺跡調査，完新世前半のスラウェシ（セレベス）島西南部におけるトアラ（Toala・Toale）文化の時期区分の提示などがある。関連して，スラウェシ島南部で洞窟壁画遺跡も発見している。また，新石器時代関係では，スラウェシ島中西部 Karama 川流域のカルンパン（Kalumpang）遺跡や，ジャワ島東部のケンデン＝レンブ（Kendeng Lembu）遺跡などの調査が知られる。さらに，青銅器・鉄器時代（古金属器時代）のスンバ島東部ムロロ（Melolo）遺跡やジャワ島西部の甕棺墓遺跡，そしてジャワ島東部やバリ島の石棺墓などの巨石記念物遺跡の調査も著名である。

その後，インドネシア共和国政府の脱オランダ植民地政策本格実施化などに

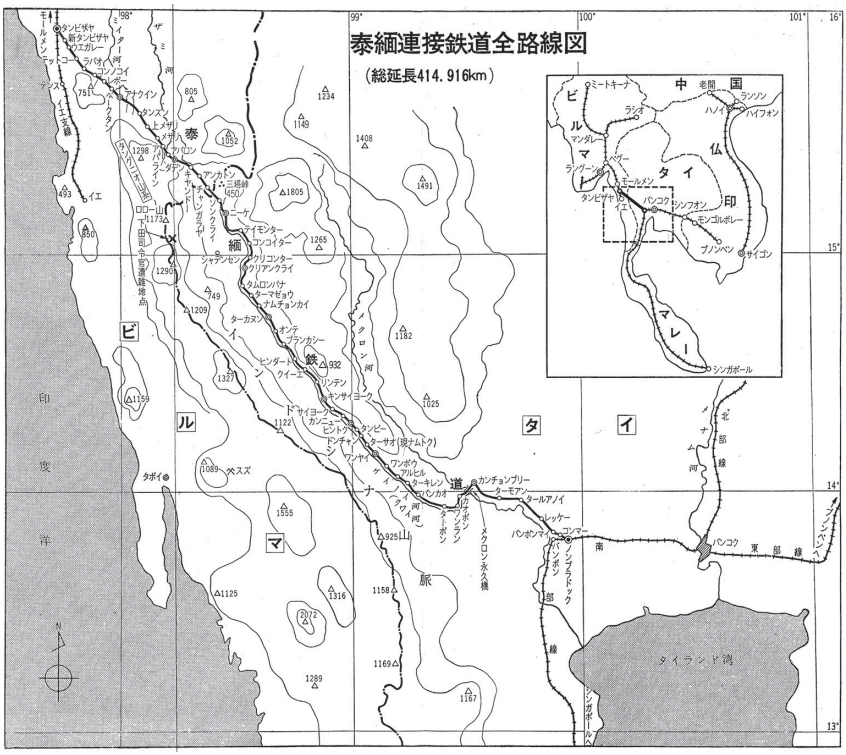
伴い，他の多くのオランダ系入植者とともに，van Heekeren も1956年に故郷のインドネシアを離れて，オランダ王国北ホラント州ハールレム（Haarlem）に移住し（Bartstra 1997：46頁），ライデン（Leiden）にある国立民族学博物館（Rijksmuseum voor Volkenkunde）に勤務した（Bakker 1960）。そして，インドネシアにおける調査研究成果の集大成として，植民地時代のさまざまな研究者の調査成果も網羅した戦後初のインドネシア先史考古学の体系的概説書『インドネシアの石器時代』（van Heekeren 1972，初版は1957年刊行）と，『インドネシアの青銅器・鉄器時代』（van Heekeren 1958）の２冊を，オランダ王立地理学・言語学・民族学研究所（オランダ王立東南アジア・カリブ地域学研究所）から刊行した。インドネシアとオランダの国交正常化後は，1970年にインドネシア・オランダ合同調査団によるインドネシア東部の旧石器時代遺跡調査なども実施している。また，日本軍捕虜時代の泰緬鉄道建設強制労働従事中の発見を契機とした戦後のタイの先史考古学に関する多くの調査研究成果のほかに，南米ヴェネズエラ沖合のカリブ海にあるオランダ領キュラソー諸島の先史考古学に関する調査報告などもまとめている。

これらの傑出した研究業績に対して，インドネシア大学・ライデン大学・コペンハーゲン大学から名誉博士号を授与されている。

1972年～1973年には一年間にわたる最後のインドネシア訪問を行い，インドネシア各地で講義を行った。そして，オランダ帰国後，４か月に渡る闘病生活を経て，オランダ王国北ホラント州ヘームステーデ（Heemstede）で，1974年９月10日に波乱に満ちた生涯を72歳で終えた。

２．泰緬鉄道（泰緬連接鉄道 Thai-Burma Railway）建設と捕虜の状況

泰緬鉄道（図２・３）は，タイ（泰国）のノーンプラードゥク（Nong Pladuk）[2]からミャンマー（緬甸・ビルマ）のタンビュザヤ（Thanbyuzayat）までを結ぶ全長414.916km の鉄道である（内海・マコーマック・ネルソン編　2023：28頁，永瀬　1986）[3]。1942（昭和17）年６月７日に日本陸軍の南方総軍が南方軍


泰緬連接鉄道全路線図
（総延長414.916km）
98°
99°
100°
101°
16°
15°
14°
13°
モールメン
タンビザヤ
新タンビザヤ
ウエガレー
ミイ
ミイ河
ラバタ
ニッコイ
ニッコイ河
ケーダ
ナナウイン
ダンズン
トメザ
メザ
ハ
ハ河
ラーデン
ラーデン河
アンカン
三橋線
(450)
ナムチャン
ナムチャン河
ニーケ
ロロー山
1173
下田司令官慰霊地碑
1290
シャテンセン
749
1209
ターカヌン
ターカヌン河
イエ
安線
493
850
1298
1052
805
1234
1149
1408
1491
1805
1265
1182
1025
1327
1122
1089
1555
1159
1125
1316
2072
1289
1169
1167
1158
925
932
1326
泰
緬
鉄
道
脈
ビルマ
タイ
印度洋
タボイ
スズ
モーコー
ターコー
ターコー河
ナナウイン
ナムチャン
ナムチャン河
ロンコー
コンコイター
クリコンター
(クリアンクライ)
タムロンバナ
ターマゼウ
ナムチョンカイ
ターカヌン
ターカヌン河
ウオンテ
ブランカシー
ヒンダード
クイーニ
ムンテン
モンサ
ヨーク
ドサイ
カンニュー
ヒントク
タンビ
ドンチャン
ターサオ
(鉄オムトク)
アンヤイ
ワンボウ
アルビル
ターキレン
ウンカオ
ウンカオ河
ターボン
カンチョンブリー
ターモアン
タールアノイ
レッケー
バンポンマ
コンマー
ソンクラブリ
ソンクラブリ河
メクロン永久橋
メクロン河
クウェーヤイ河
ナムトク
ナムトク河
ターボン
ターボン
ソンクラブリ
ソンクラブリ河
ターボン
ターボン
ソンクラブリ
ソンクラブリ河
ターボン
ターボン
ソンクラブリ
ソンクラブリ

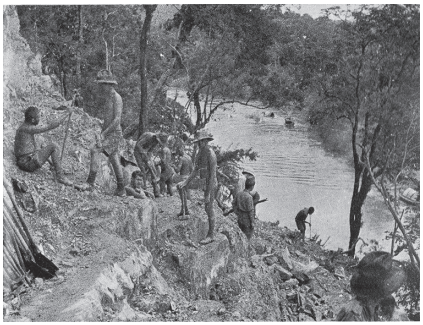
謀な工期短縮命令を発した。その結果，日本兵の捕虜への怒号にちなむ「スピード時代」とよばれる一日10時間以上の過酷な連続長時間労働を強いられる期間となり（図３f・g），さらに多くの犠牲者を出した。そして，1943年10月25日に完工したが，その後も補修工事が続いた（広池　1971，内海・マコーマック・ネルソン編　2023，吉川　2011）。

設備が整った捕虜収容所の典型的な例では，竹とニッパヤシの葉でできた100m近い長さの簡素な作りの小屋を複数設けた。内部に設置された一続きの仕切り無しの寝台は，捕虜一人当たりの横幅が75cm 程という過密状態で多人数が同時使用した（Moremon 2009：41頁）（図３c・d）。少量の米飯が捕虜に対する主要な配給食糧であったため，栄養失調による脚気の発症が多くみられた。さらに，不衛生な環境が原因でマラリア・赤痢・コレラ・チフス・熱帯性潰瘍などのさまざまな疫病が蔓延したが，医薬品も欠乏していた（吉川　2011：146-150頁・157-191頁）。

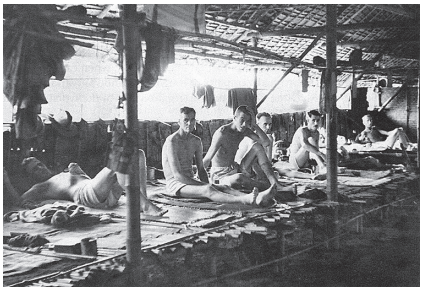
日本軍による捕虜への体罰・拷問・虐待も横行した。日本軍の許可外の私物所持発覚時や日本軍の命令に背いた際などには，しばしば残酷な拷問が行われた。たとえば，①ラジオを隠し持っていた容疑の被害者は，針金で身体を拘束し鼻などから管で水を注ぎ，②その後，水で膨張した被害者の腹部の上を，拷問者が飛び跳ねまたは蹴り上げながら角材で殴打する。また，③日本軍警備兵への反抗容疑の被害者は，木に縛りつけられ，その前面に水をたたえたバケツを置き，水や食料を与えずそのまま２昼夜にわたって放置される。④尖った角部分を上に向けて並べた角材列の上に脛をあてさせ，大きな石を抱えさせたまま１～３時間膝立ちさせる。⑤つま先立ちで手が届く程の高さの木の枝から両親指のみの結束で被害者を吊り下げる，などの拷問を捕虜のイギリス兵 Leo Rawlings（レオ＝ローリングス）が目撃して描き残している（永瀬訳　1984：159頁）[4]。

そして，このような拷問が充分予期されたにもかかわらず，日本軍による厳しく頻繁な所持品検査をかいくぐり，さまざまな私物を秘かに保管し続ける捕虜が絶えなかった。たとえば Leo Rawlings の場合は，描きためた多数のスケッ

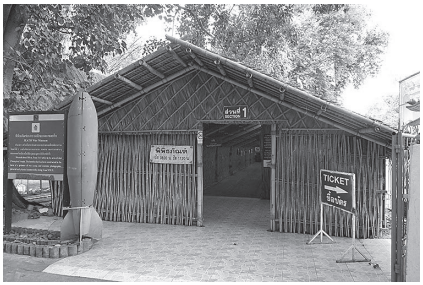
a．枕木運搬労働・1943年（Moremon 2009：５頁）



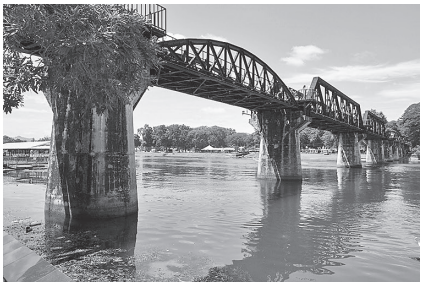
b．路盤作業（清水編　1978：別冊32頁）



c．収容小屋内部寝台（Moremon 2009：41頁）



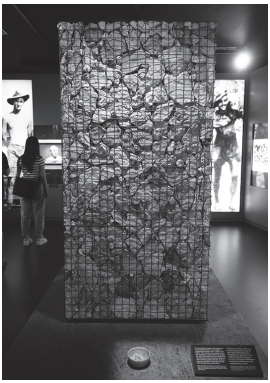
d．復元収容小屋・JEATH War Museum
※筆者撮影



e．クワイ河鉄橋　※筆者撮影

f．Hellfire Pass　※筆者撮影

図３　泰緬鉄道（1）



g．一日の作業量（石柱）と食事量（小皿）の比較・Hellfire Pass Memorial 展示　※筆者撮影

h．カーンチャナブリー連合軍墓地オランダ兵区画一部　※筆者撮影

図３　泰緬鉄道（2）

チを，捕虜収容小屋の寝台下に穴を掘って秘匿し，移動時には自身が使用する杖に巻きつけるか，または個人用の毛布の内側に巻いて携行することで，解放時まで保持しつづけることに成功したたという（永瀬訳　1984：152・154・162頁）。また，魔法瓶内に保管した例や，容器に封入して捕虜墓地の棺内に保管した例（永瀬　1986：27-28頁，河内・山口訳　1993：６頁）なども知られる。このような生命に危険がおよびかねない状況で私物秘匿保管を行った動機としては，捕虜をめぐる具体的な記録証拠を残すのみでなく，奴隷的境遇に対する個人の自由と人間性を保ち続けるための抵抗という側面も大きかったと考えられる。

泰緬鉄道建設には，捕虜約５万人・労務者（苦力＝クーリー）約７万人以上が動員された。そして，「枕木一本，人一人」と例えられる43000人（うち捕虜12000人）もの膨大な死者が出たため，泰緬鉄道は「死の鉄路（Death Railway）」として広く知られるようになった（内海・マコーマック・ネルソン編　2023：126頁）。限定的ながらも「自治」が許容された連合軍捕虜に比べて，アジア人労務者はさらに劣悪な極限状況におかれた。

タイ国立公文書館所蔵の当時の機密文書などを基にした吉川利治の研究によれば，労務者（苦力）はインドネシア人とインド系を含むマラヤ人・ビルマ人・中国人（華僑）などから構成されていた。しかし，日本軍による労務者の人数把握がずさんで，敗戦時の記録類焼却の影響もあり，正確な総数が不明である。労務者の総数が約20万人として，約６万人（死亡率約30％）が死亡した可能性も指摘している（吉川　2011：183-184頁）[5]。そして，泰緬鉄道建設に送り込まれた連合国（イギリス・オーストラリア・オランダ・アメリカ）の捕虜総数は61806人（オランダ人捕虜総数17985人）で，死者は12400人（死亡率20.06％）に達した（吉川　2011：114頁第３表・182頁）。なお，Rod Beattie の研究によれば，van Heekeren を含むオランダ人捕虜の総数は17990人で，死者は2737人（死亡率15.21％）であったとされる（Beattie 2015a：117頁）（図３h）。

1943年２月９日午前４時と８時に，シンガポール（昭南島）発の捕虜輸送列車がタイ中西部の泰緬鉄道起点ノーンプラードゥク駅に到着した。それぞれの列車（貨車）は，「オランダ・現地兵」各625人の合計1250人を積載していた（吉川　2011：112頁第２表）。そして，この1250名のうちの一人が，van Heekeren であったとみられる。van Heekeren はこの時すでに40歳で，おそらく20代を中心とする捕虜の中ではかなりの年長者であったはずである。

３．「死の鉄路」での考古学的探索

van Heekeren のタイにおける強制労働中の考古学的探索成果は，戦後すぐに三つの文献で報告されている。簡潔に主要な発見の要点のみが述べられた速報的な第一報（van Heekeren 1947a）と，一般向けに記者が編集した新聞記事（van Heekeren 1947b）（図４），そしてもっとも詳細に経緯と探索状況までも含めて調査成果をまとめた学術論文（van Heekeren 1948）である。そこで，おもにその三番目の論文「シャムにおける先史時代の発見：1943～44年」（van Heekeren 1948）から，現地での考古学的探索を取り巻く具体的な状況につい

APRIL 5, 1947 THE ILLUSTRATED LONDON NEWS 359

A ROMANCE OF ARCHÆOLOGY: STONE AXES FROM THE "RAILROAD OF DEATH."

"THE ruling passion, be it what it will, The ruling passion conquers reason still," wrote Pope; and not only reason, but danger, difficulty, endless suffering, sickness and malicious persecution are all alike vanquished by the will of man. And of all the innumerable stories of man's will to do that which interests him at whatever cost, few are more striking than those which are told of the European prisoners in Japanese hands during the war, and especially those forced or deceived into working on the ghastly "Railroad of Death" project. This project was the completion of the Bangkok-Moulmein railway, which ran through the jungles of Siam and Burma and on which thousands of British, Australian and Allied P.O.W.s were employed by the Japanese in conditions whose horror and inhumanity can be partly measured by the fact that no fewer than

[Continued below.

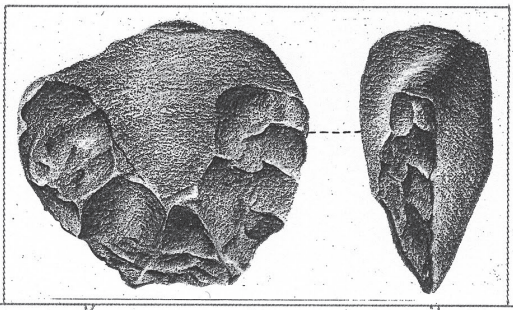


FIG. 1. FOUND NEAR THE SIAMESE "RAILROAD OF DEATH": A PALÆOLITHIC QUARTZITE HAND-AXE (FRONT AND SIDE) WITH SINGLE-SIDED CHIPPING.

Continued.]

impassable limestone ridges. If ever prehistoric tribes wandered through the country, it is obvious that they must have followed the course of this river, which would provide them with drink, food and a fairly passable trail. The origin of the different tribes was usually in China, and the investigations of the last fifteen years have shown that Melanesian and Indonesian migrations passed through Indo-China and Malaya on their way to the islands of the Indian Archipelago, and that waves of Veddas and Negritos from India have sometimes followed the same route. Prehistoric finds in Siam are, however, practically unknown. . . . This was enough reason for me to examine the numerous sandhills dug out along the new railroad. In the special circumstances, methodical investigation was, of course, impossible, and I had to restrict my archæological work to a superficial examination of the excavated sand during the short periods of rest. At Ban-Kao, about 54 miles from Ban-Pon, the railroad passed an old river terrace with pebble-beds. To my intense joy I found several early-palæolithic hand-axes among the pebbles (Figs. 1-3)." Later, in the neighbourhood of Wan-Po (about 66 miles from Ban-Pon), Mr. van Heekeren found in two caves a number of coarse large scrapers (Fig. 4) with high backs and chipped only on one side, which he describes as mesolithic. He also found a number of neolithic artefacts (Fig. 6), including some ground and polished square-axes. He had

[Continued below.

FIG. 2. ANOTHER PALÆOLITHIC HAND-AXE FROM SIAM: FOUND BY A WAR PRISONER OF THE JAPANESE AND GREATLY EXTENDING THE KNOWLEDGE OF PREHISTORIC S.-E. ASIA.

Continued.]

5000 of them perished from ill-treatment and tropical disease. Yet even so, many of the men so employed continued to pursue in their scanty spare time the professions, studies and hobbies which were their ruling passion. A commercial artist, who was one of their number, recorded with home-made materials scenes of the railroad's construction—several of which were reproduced in our issue of January 5, 1946; collections of butterflies were made by some of the prisoners, and others compiled ornithological notes. Mr. H. R. van Heekeren, however, one of those who worked on the railway, was a keen archæologist and was able not only to compile copious notes, but actually to make some important Stone Age discoveries, and even to preserve the majority of his finds and smuggle them back to civilisation. He has written himself: "Knowing that Siam was practically *terra incognita* in this respect, I kept an open eye to the possibility of discovering some archæological objects. The railroad was projected beside the River Meklong (Fig. 5), whose broad valley passed between almost

[Continued above, centre.

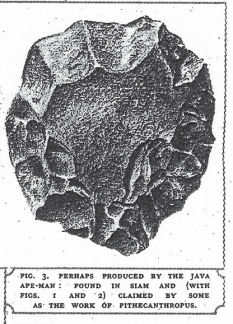


FIG. 3. PERHAPS PRODUCED BY THE JAVA APE-MAN: FOUND IN SIAM AND (WITH FIGS. 1 AND 2) CLAIMED BY SOME AS THE WORK OF PITHECANTHROPUS.

Continued.]

in India and in the caves at Chou-Kou-tien with remains of Sinanthropus (Pekin Man). It is important to know how far south this northerly form extends and to establish the overlap with the artefacts presumably associated with Pithecanthropus (Java Man). This find in Siam suggests that the distribution of both forms corresponds with the distribution of the larger fossil apes of the same period, the Middle Pleistocene, and hence that Pekin and Java Men reacted to environmental conditions either as their ape-like second cousins, physiologically, or as men, their first cousins, psychologically, being traditional and conservative in their hunting methods and the game they sought. . . . Evidence of distribution, and the close association of comparable artefacts with Pekin Man, a near relative of Java Man, is almost conclusive that they are of Java Man manufacture. . . . The reason for the unilateral chipping lies not in the character of the material, but in the tradition of tool manufacture characteristic of that particular complex of palæolithic culture."

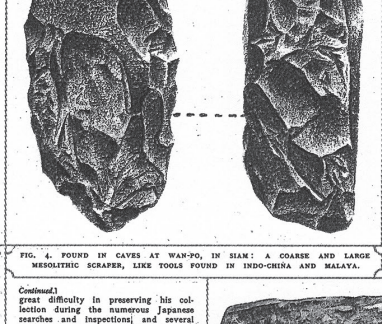


FIG. 4. FOUND IN CAVES AT WAN-PO, IN SIAM: A COARSE AND LARGE MESOLITHIC SCRAPER, LIKE TOOLS FOUND IN INDO-CHINA AND MALAYA.

FIG. 5. SHOWING THE SITE OF THE DISCOVERIES DISCUSSED ON THIS PAGE. BAN-KAO LIES ON THE BANGKOK-MOULMEIN RAILWAY.

Continued.]

great difficulty in preserving his collection during the numerous Japanese searches and inspections, and several times the objects were taken from him and thrown away. With the help of friends, however, he was able to recover the majority, but the neolithic square-axes were irretrievably lost. Concerning the most important find, the palæolithic hand-axes, which he describes as being of the Madras type, Mr. van Heekeren ascribes them to the mid-pleistocene period, and says: "That is the same period in which the Pithecanthropus, the Ape-man of Trinil, still existed on Java. Any connection between the hand-axes and Pithecanthropus is, however, highly improbable, because, although these objects may seem very primitive to our eyes, it is not

[Continued top-right.

FIG. 6. ALSO FOUND ALONGSIDE THE "RAILROAD OF DEATH": A GROUND AND POLISHED NEOLITHIC AXE OF A TYPE WIDESPREAD IN THE FAR EAST.

図4　Illustrated London News 誌での van Heekeren の考古学的発見に関する記事
出典：(van Heekeren 1947b)

てまとめる[6)]。

1942年３月の日本軍によるインドネシア占領に伴い捕虜となった van Heekeren は，1943年２月９日にタイ中西部のノーンプラードゥク（Nom-Pladuk）捕虜収容所本所に到着した。その後，ノーンプラードゥク駅から約13km（８miles）内陸の Taroewa（筆者註：おそらく約25km 地点の Tarunoi＝タールアノーイの誤記）村に移動させられた。そして，ここからクウェーノーイ河（Khwae Noi＝Kwai Noi: van Heekeren のいう Mei Fingnoi 河または Meklong 河）沿いに，ミャンマーとの国境にある三仏塔峠（Three Pagodas Pass）までの約225km（140miles）の間で，鉄道建設労働を強いられた。作業のあいまに，建設全区間とその近隣で考古資料の存在に絶えず注意を払い探索し続けた。その結果，ノーンプラードゥク駅を起点に約121km（75miles）までの間で複数の地点から先史時代遺物を発見した（図５・６）。ちなみに，過酷な状況から現実逃避して自我を保つため，わずかな時間を利用して，蝶や植物の収集や鳥類の観察記録をする捕虜も他にいたとされる（van Heekeren 1947b, Soejono 1976：108頁）。当時40歳であった van Heekeren は，おそらく20代を中心とする捕虜仲間から比較的軽い労働が優先配慮されたとみられ，釘でレールを枕木に固定する作業班に属していた。

van Heekeren は，鉄道建設工事に伴う土砂移動箇所で重点的に注意を払っていたが，当然のことながら，先史時代遺物発見現場で詳細な調査記録を行うようなことは問題外にまったく不可能な状況であった。ただし，旧石器時代前期と考えられる石器を発見した際には，捕虜仲間の生物学者の発案協力で，マラリア感染防止対策の必要性を日本軍に認めさせることで，マラリア蚊（ハマダラカ）駆除作業を口実に発見地点周辺の重点的な追加探索をある程度行うことができたとされる（Bakker 1960）。しかし，頻繁に行われた所持品検査などにより，採集資料の大部分も失い，書き記した学術的記録類も日本兵に没収された（van Heekeren 1948：24頁）。なお，van Heekeren が没収された記録類には，遺物採集地点の地形・位置などを示した地図や地層断面図などの微細な地理的情報が，考古学の通例で確実に詳しく図解されていたはずである。日本軍によ

図５　Ban Kao 駅北西の線路際・Bang 遺跡方向遠望　※筆者撮影

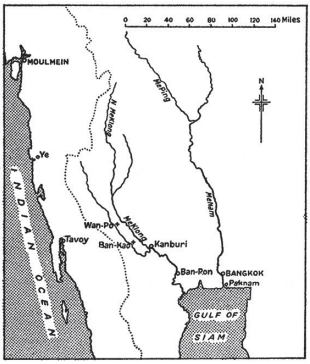


Fig. 1
Map showing locations of Stone Age sites in Siam.

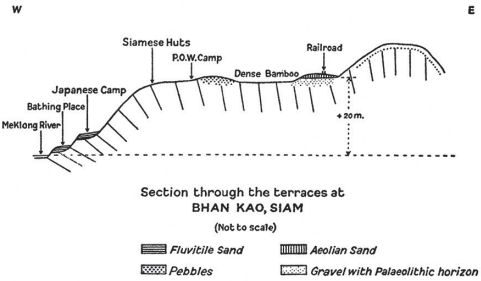


Fig. 2

図６　van Heekeren の遺物採集地点位置　出典：(van Heekeren 1948：25頁 Fig. 1・2)

るそれらの発見押収時には，拷問を伴う厳しい取り調べが行われたことも充分予想されるが，その具体的状況について van Heekeren は特に触れていない。ただし，このような体験は，多くの泰緬鉄道強制労働生還者が患っていた戦争トラウマ（psychological trauma＝心的外傷）（中尾　2022）に深く関わるため，あまり年月が経過していない段階での冷静な回想や，当時の極限状況を知らない第三者には説明が困難な事項でもあった。

van Heekeren は，ノーンプラードゥク駅から約64km（40miles）までの鉄道建設区間であるクウェーノーイ河沿いの平野部で多くの遺物を発見した。これらの地域では，地層上部に厚さ約1.5mの河川堆積由来の石英砂層が堆積しており，それらの中に新石器時代や金属器時代初期と考えられる縄席文土器片を確認している。また，いくつかの地点では，これらの砂層中に青灰色のローム層が間層として堆積しており，その中にアジアゾウ属（*Elephas*）の歯が含まれているのを発見したが，投げ捨てられてしまったという。

そして，バーンポーン（Ban-Pon，筆者註：近接するノーンプラードゥク駅と同義と考えられる）から86km 地点のバーンカオ（Ban-Kao）村周辺で，1943年３月に数多くの注目すべき発見をした。更新世中期に形成された段丘の一部と推測される低平な丘の基層や，黄灰色の風成砂層の下部に堆積した河川堆積由来の砂礫層中とその境界付近に，多数の円礫が含まれることを確認した。そして，鉄道建設に伴うそれらの露頭から，旧石器時代前期と考えられる珪岩製・珪質砂岩製・粘板岩製などの粗い剥離面をもつ片面加工礫器を合計６点採集したのである。その内の捕虜からの解放時まで保持できた３点が，図７－１・２・３（図12a，図13a）である。いずれも，河川堆積由来の砂礫層中に原位置を保った状態で採集したが，剥離面はほとんど摩耗していない。採集地点は，現在のクウェーノーイ河の河面からおおよそ１km ほど離れた高さ20mほどの位置にあたる（図６右）。こうした状況は，ミャンマー（ビルマ）のエーヤワディー河（イラワジ Irrawaddy 河）渓谷（上ビルマ地方＝An-ya-tha 地方）における旧石器時代前期のアニャティアン（Anyathian / Anyatha）石器群（文化）の出土状況（de Terra and Movius 1943）と類似することを指摘している。

そこで，これらのバーンカオ村周辺採集の片面加工礫器を基準に，クウェーノーイ河の別称フィンノイ河にちなみ，旧石器時代前期のフィンノイアン（Fingnoian / Fingnoi）文化を提唱した（van Heekeren 1948：28頁）。

そのほかにも，次のような考古学的発見をしている。(a)1943年３月にバーンカオ駅近くの線路脇の砂山で新石器時代の方角磨製石斧を２点採集した（図７－７，図12c，図13c）。これに関連して，van Heekeren は，地元住民の間での磨製石斧に関する超常的な伝承解釈を聞き取っている。それによると，これらは天空に由来するもので，雷石（*Hien Fan*）または雷歯（*Tat Fan*）と呼ばれ，護符や愛玩品として携行される場合が多いとしている（van Heekeren 1948：31頁）。捕虜収容所内に少数出入りが許されていた地元住民の行商（酒保）から聞き取った伝承の可能性がある。(b)1943年４月に，97km 地点の赤色粘土層を掘削中に，化石化していないバク（*Tapirus*）の可能性がある歯が出土した。(c)1943年６月に，ワンポー（Wan-Po）から約16km（10miles）ほど離れた地点で，鉄道建設に関連して日本軍が採砂作業した洞窟の壁際で，数人の捕虜仲間の協力を得て表面観察を行い，そこで未攪乱の固着した砂層を確認した。そこには，灰状の物質・ほとんど化石化していない骨片・淡水産貝類のほかに，粗い加工の石器が複数含まれていた（図７－４・５・６，図12b，図13b）。ここでは，遺物８点を採集したが，捕虜からの解放時まで保持できたのは３点のみであった。van Heekeren は，これらの資料を更新世以降の中石器時代の文化に属するものと推測した。戦前にタイで最初の考古学的発掘調査を実施した Fritz Sarasin がタイ北部の洞窟遺跡出土石器について指摘した（Sarasin 1933）のと同様に，ヴェトナム北部のホアビン省の洞窟遺跡群で初めて確認されたホアビニアン（Hoabinhian / Hoabinh）文化（Colani 1927）の広がりとの関連性を指摘している（van Heekeren 1948：30-31頁）。

ノーンプラードゥク駅を起点に約120km 以北の山間部地域では，継続的な探索にもかかわらず，考古資料を確認できなかった。その要因として，何か月にもわたって日照時間が無いほど激しい降雨が昼夜続く過酷な雨季の状況を自身が体験したことなどから，人類の居住にこれらの地域が向いていなかった可

H. R. van Heekeren. **Prehistoric Discoveries in Siam, 1943–44**

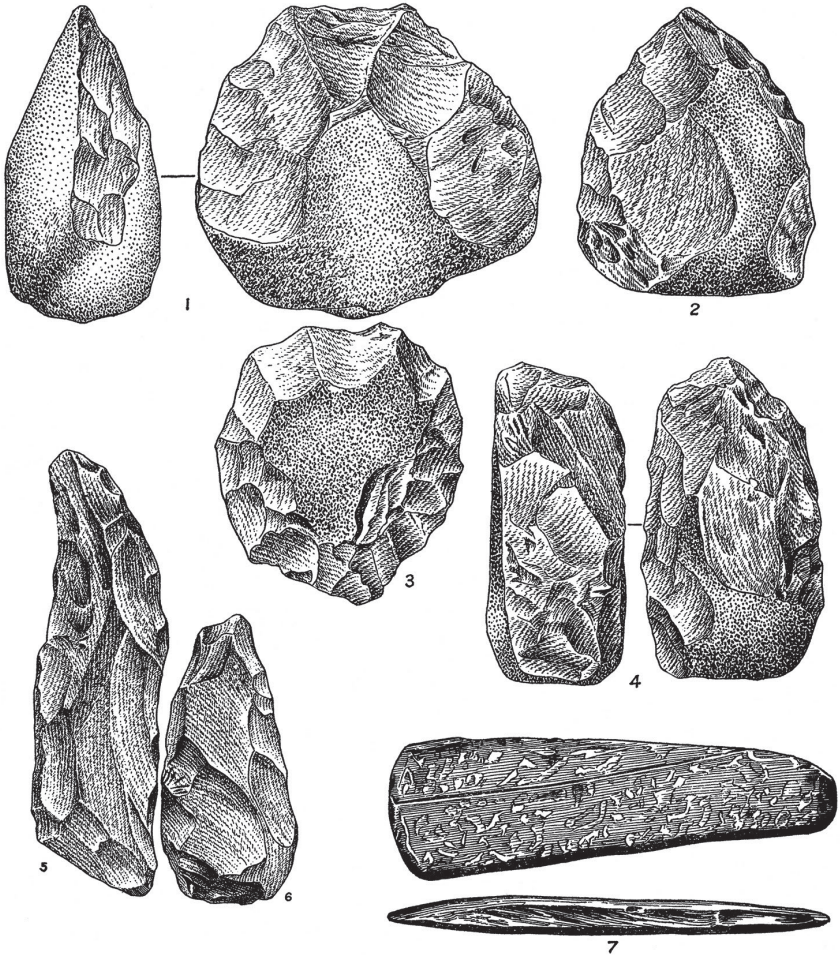


Fig. 3
Stone Implements from Siam.

Nos. 1–3. Palaeolithic implements from Ban-Kao in the valley of the Mei Fingnoi or Meklong River. ($\frac{3}{4}$)
Nos. 4–6. Mesolithic tools from cave deposits near Wan-Po, a village some 21 miles northwest of Ban-Kao in the Mei Fingnoi Valley. ($\frac{3}{4}$)
No. 7. Polished stone axe from the surface near Ban-Kao railway station. ($\frac{1}{2}$).

図7　van Heekeren の採集遺物「１～３旧石器，４～６中石器，７新石器」
出典：(van Heekeren 1948：27頁 Fig. 3)

能性を指摘している（van Heekeren 1948：26頁）。

また，van Heekeren の考古学的探索は，鉄道建設作業現場と捕虜収容施設のあったクウェーノーイ河左岸にほぼ限られ，対岸の右岸側へは数回程度泳いで渡る機会があった程度で，充分な探索は不可能な状況であった。

そして，13箇月におよぶジャングルでの強制労働生活を経て，1944年３月にバーンポーン近くのノーンプラードゥク第Ⅱ捕虜収容所本所に帰還することができた。そこには，帰還数日前に死去した親しい捕虜仲間の Jan Buurman がノーンプラードゥク近隣で採集した美しい有肩磨製石斧が，van Heekeren のために残されていたという。この資料も結局日本軍に没収され，最後に目撃されたのはノーンプラードゥク捕虜収容所司令官の机上で文鎮として利用されていた姿であった。

なお，多くの発見があった1943年３～４月頃のバーンカオ周辺における捕虜のおかれていた具体的な状況について，van Heekeren は詳しく言及していない。しかし，バーンカオより７km ほどノーンプラードゥクに近い（クウェーノーイ河下流側の）ワンタウキーン（筆者註：おそらく Wang Takhian, Beattie 2015：125頁）に同時期にいた捕虜のイギリス軍医療将校 Robert Hardie の日記（河内・山口訳　1993）に言及がある。それによると，1943年２月に上流側に移送される多くのオランダ人捕虜を目撃し，対話しており，３月のバーンカオ（バンカウ）では病人も含めて多くの者が露天で宿営している状況であったことを述べている。また，周辺の広い範囲で，脚気・赤痢・ジフテリア・熱帯性潰瘍・疥癬やさまざまな心身の衰弱病が同時期に蔓延していたことも記録している（河内・山口訳　1993：99-106頁）。ただし，病人の医療キャンプへの後送と，バーンカオの捕虜宿営地への食糧の補給は，1943年４月までは比較的滞りなく行われていたため，死者はまだ出ていなかったとされる[7]。

しかし，その後，厳しい雨季のなかでの泰緬鉄道建設「スピード時代」が到来した。極端な工期短縮命令で連続長時間労働が捕虜に強いられた結果，多くの犠牲者が出た。van Heekeren の考古学的探索は明らかに極限状況で行われていたのである。そして，その考古学的探索と特に採集資料の秘かな保持に，このような深刻に困難な状況下での捕虜仲間の協力支援があったことを，van Heekeren は深い感謝の言葉とともに述べている（van Heekeren1948：24頁）。

４．「地獄船」による日本への移送

1943年10月25日に泰緬鉄道完成後，抑留中の連合軍捕虜10770人は，日本や日本軍占領下のフランス領インドシナでの強制労働に順次送られることになった（吉川　2011：128頁）。van Heekeren は，1944年５月29日に，タイのノーンプラードゥク第Ⅱ捕虜収容所で，日本に移送されるための最終検査を受けた。その際に，すべての収集考古資料が没収された（van Heekeren 1948：24頁）。そして，シンガポールを経由して日本へ移送されることになった。1944年６月４日にオランダ人捕虜1000人を含む合計2200人の連合軍捕虜が日本へ向けて出発している（吉川　2011：127頁第16表）。van Heekeren は，1944年６月４日にシンガポールを出港し，1944年６月18日に門司港に到着した「帝亜丸」で移送された約1000人のうちの一人とみられる。帝亜丸は，フランス領インドシナのサイゴン（現ホーチミン市）で日本軍が押収した豪華客船 Aramis 号を改称した船で，捕虜や兵員移送などに転用された。しかし，捕虜が収容されたのは，客室ではなく船倉であった。捕虜が甲板上に出ることが許されたのは一日15分～20分程度で，多人数を船倉内に密集して閉じ込めたため風疹が蔓延したという[8)]。

戦時中の国内の労働力不足を補うために，海外の占領地各地から捕虜が日本国内へ移送された。捕虜をすし詰めに収容した捕虜移送船船倉内部は蒸し暑く，食事と水分の支給は不足し，便所はひどい汚染状態であったため，捕虜たちから「地獄船（Hell Ship）」と呼ばれることになった。船内での病死者・衰弱死者も少なくなかった。しかも，この日本までの捕虜移送船には赤十字の標識などが掲示されなかったことで，連合軍による攻撃を受けて沈没した船も多かった。大日本帝国の降伏までに連合軍により撃沈された捕虜移送船は23隻で，犠牲者は10834人に達した（中尾　2022：77頁）。

５．大正鉱業中鶴炭鉱（福岡県中間市）での捕虜生活

1944（昭和19）年６月18日に帝亜丸が到着した門司港（福岡県北九州市）周辺は，連合軍による空襲を受けていた[9]。下船した捕虜たちは，すぐに25名ずつ全裸にされて，本人と着衣が消毒され，その後福岡県内各地の捕虜収容所へ鉄道で移送されることになった。それらは，福岡俘虜収容所第６分所（水巻）300人，福岡俘虜収容所第９分所（宮田）100人，福岡俘虜収容所第17分所（大牟田）420人，福岡俘虜収容所第21分所（中間）350人であったとされる[10]。van Heekeren は，このうちの福岡俘虜収容所第21分所（中間）350人のうちの「認識番号：196302・階級：兵卒（sld）」の一兵士として，オランダ人捕虜名簿310人中にその名前を確認できる[11]。

そして，この門司港到着時に，van Heekeren にとって奇跡がおきた。約20日前にタイのノーンプラードゥク第Ⅱ捕虜収容所で没収され，もはや永久に失われたと思われていた収集考古資料を，捕虜仲間の秘かな助力で，門司港到着の際に取り戻すことできたのである（van Heekeren 1948：24頁）。その間の資料の保管・移送方法の詳細は述べられていないが，たとえば捕虜仲間が荷役に関わった日本への移送物資などに秘かに再回収した資料を紛れ込ませておいた可能性なども考えられる。

門司港から福岡俘虜収容所第21分所までの移動は，同分所に収容されたオランダ人捕虜のＪ.Ｄ.ルーゲの日記によると，６月18日午後10時に列車に乗り，午後11時30分に折尾駅で乗り換え，６月19日午前２時30分に収容所に到着したという（Kemperman・Broers 編　2004：72頁）。門司港駅から中間駅までの距離は，約34km である。極端に時間をかけた深夜の移送は，おそらく移動距離や地理感覚を捕虜たちに混乱させる意図があったと考えられる。収容所は100ｍ四方で，内部は畳敷の新しい建物で（Kemperman・Broers 編　2004：74頁），時に比較的良質のパンが少量与えられたが（Kemperman・Broers 編　2004：185頁），基本は少量の米飯が主で，栄養が足りずに捕虜たちは「歩く骸骨」のような姿になっていたとされる（Kemperman・Broers 編　2004：192頁）。また，

収容所の各建物に50名，各部屋には８名が収容された。収容所から炭鉱までは徒歩20分であったとされる[12]。日本降伏時の収容捕虜数は588人（オランダ311人，オーストラリア175人，イギリス99人，アメリカ３人）であった[13]。van Heekeren は，この福岡俘虜収容所第21分所や日本国内での抑留中の状況については，ほとんど記していない[14]。ただ，取り戻すことができたタイでの収集考古資料は，収容所の床板下に秘匿保管していたようである（Bakker 1960）。

この収容所の位置は，大日本帝国降伏後に，アメリカ軍の B-29 部隊による捕虜収容所への食糧等の補給物資投下作戦「POW（Prisoner of War＝戦争捕虜）補給作戦」の報告から推測可能である。「POW 補給作戦」の一環で，福岡県遠賀郡中間町（現在の福岡県中間市）にあるこの福岡俘虜収容所第21分所も，1945（昭和20）年９月10日に補給物資投下対象となっている（奥住・工藤・福林　2004：90頁）。その「報告 No.84」と掲載写真（図８）によると，高い柵に囲まれた17棟の兵舎形建物と，その中の左端中央の細長い建物屋根上横向きに「PW」という文字を確認できる。この写真を，1948（昭和23）年１月19日にアメリカ軍がこの付近を撮影した航空写真（USA-R211-38）（図９）と比較すると，図８上部を左右に横切る河川・水路とその左端付近に特徴的な曲がり方で川をまたぐ道と橋の位置関係などから，堀川と曲川に掛かる岩瀬祇園橋と識別できる。これを基準に現在の地図と対比すると，福岡捕虜収容所第21分所は，おおよそ現在の中間市中鶴４丁目１・６・７番付近に位置していたと考えられる（図10c・d）。周囲のほぼ三方が水路・河川や田畑であり，監視・隔離の利便性が特に重視されていたためと推測される。

この近隣に当時あった操業中の炭鉱は，大正鉱業中鶴炭鉱の中鶴一坑（中鶴炭坑）・中鶴二坑（大根土炭坑）・新手本坑（三尺層炭坑）などが代表的である（長谷ほか編　2003：10頁）。中鶴一坑は収容所から直線距離で約500m，中鶴二坑は収容所から約1.4km，新手本坑は約2.3km である。収容所から炭鉱まで徒歩20分であったとすると，van Heekeren らが強制労働に従事していたのは，中鶴二坑の可能性が高い（図９d，図10a・b）。

福岡俘虜収容所第21分所収容捕虜の使役企業は，大正鉱業中鶴鉱業所である。

図８　米軍が撮影した福岡俘虜収容所第21分所
中央左側の塀に囲まれた長方形区画内横４列の建物群。左端の長い建物の屋根上に横向きの「PW」の文字が見える。　出典：（奥住ほか　2004：90頁）

当時の主要役職者は，社長：伊藤傳右衛門，生産責任者：伊藤八郎，鉱業所長：日高兵吉となっている（林編　1990：442-443頁）。また，福岡俘虜収容所第21分所を担当した軍関係者は，分所長の末松一幹中尉（1944年・昭和19年６月～７月）または後任の平石広喜中尉（1944年・昭和19年７月～1945年・昭和20年９月）を含む合計24名の日本軍兵士であった（林編　1990：617-620頁）。なお，同時期の中鶴炭鉱には，おもに強制連行されてきた3000～4000人の朝鮮人労働者もいた（林　1989：265-297頁）。

捕虜と地域社会の間には人間的な交流もあった。中鶴炭鉱近くで開業していた歯科医院の加来繁雄医師は，大正鉱業の労務係からの依頼がきっかけで，赤

図９　1948年１月19日米軍撮影の中間市中鶴炭鉱周辺（国土地理院・USA-R211-38）
a．福岡俘虜収容所第21分所跡，b．中間駅，c．中鶴一坑（中鶴炭坑），
d．中鶴二坑（大根土炭坑），e．新手本坑（三尺層炭坑）

a．大正鉱業中鶴炭鉱
出典：（長谷ほか編　2003：４頁）

b．中鶴炭礦偲郷碑（中間市民図書館駐車場内）
※筆者撮影

c．福岡俘虜収容所第21分所跡地北東角付近
※筆者撮影

d．福岡俘虜収容所第21分所跡地南西角付近
※筆者撮影

図10　中間市中鶴炭鉱と福岡俘虜収容所第21分所跡地の現状

十字の原則理念を踏まえて，多数の捕虜の虫歯治療を進んで無償で引き受けた。その際には，ひそかにタバコやコーヒーまで与えたという。中鶴炭鉱でも，俳優高倉健の父親を含む労務係による捕虜の虐待があったが，加来繁雄医師の人道的行為が要因となり連合軍側の戦犯追及も消極的であったとされる（上野1979：58-61頁）。また，福岡俘虜収容所第21分所のイギリス・オーストラリア人捕虜代表などから大日本帝国降伏後に出された，分所長の平石広喜中尉宛の英文「感謝状」も残されている（林編　1990：808・813頁）。ただし，この「感謝状」は，他のいくつかの収容所での「感謝状」と形式などが似通っており，敗戦後に戦犯追及を恐れた日本軍側からの要望に応じて，許容できる状況であった場合に，ある種の見本などを元に作成された可能性もある。

1944年６月18日の門司港到着後に各所に移送された捕虜は，配属先の収容所分所（水巻・宮田・大牟田三池・中間）によって境遇にかなりの差違があった。POW 研究会福林徹の「日本国内の捕虜収容所」[15]によれば，敗戦時の収容捕虜生存者数と死者数は，以下の通りである。また，各合計人数に占める死者数の割合を括弧内に示した。

水巻（第６）分所：生存1062人・死者74人（6.51％）

宮田（第９）分所：生存792人・死者47人（5.60％）

大牟田三池（第17）分所：生存1737人・死者138人（7.36％）

中間（第21）分所：生存588人・死者５人（0.84％）

ちなみに，日本国内全体の連合軍欧米系捕虜の総数は36000人で，国内連行後の死者は3500人（9.72％）である（竹内　2018：21頁）。また，ソ連邦スターリン政権下での過酷な強制労働を伴う日本兵のシベリア抑留は，総数575000名に対して，死者55000人（9.56％）である[16]。さらに，報復措置的印象を敗戦後の日本軍側に残した連合軍によるビルマ（現ミャンマー）での抑留日本兵は，総数35000人に対して死者1700人（4.86％）である（増田　2013：122頁）。

これらの数字を比較すると，日本国内での連合軍捕虜の全体的境遇は，スターリン政権の日本兵シベリア抑留とほぼ同程度かそれ以上に過酷であったといえる。そのなかで，中間の福岡俘虜収容所第21分所は，明らかに捕虜の死者数が非常に少ない。これは，加来繁雄医師のように，捕虜の対応に人道的な公正性を意識して医療や生活環境保全に尽力する人物の存在が大きかったとみられる。また，炭坑内での労働量や坑内安全環境が，他の炭鉱よりも比較的良好な状況が要因であった可能性も考えられる。

なお，福岡俘虜収容所第21分所があった中間市のすぐ北側の水巻町には福岡俘虜収容所第６分所があり，捕虜は日本鉱業遠賀鉱業所高松炭鉱で強制労働に従事させられた。そこでは，収容捕虜に多くの死者が出たのみでなく，逮捕した脱走捕虜の射殺処刑事件も起きている。敗戦直後には，戦犯追及を恐れた炭鉱側が捕虜遺骨納骨堂「十字架の塔」を急造した（林　1987・1991・2000，武富・林　2000）。1985（昭和60）年に，元オランダ人捕虜 Dolf Winkler（ドル

フ＝ウィンクラー）の水巻町再訪をきっかけに，その「十字架の塔」周囲の整備が行われ，水巻町で死亡した53人と日本国内各地でのオランダ人捕虜死者818人をあわせた合計871人の名前を刻銘した銘板が設置されている（林　1987・1991・2000，武富・林　2000，水巻町図書館・歴史資料館編　2006，水巻町歴史資料館編　2005）（図11）。

図11　水巻町捕虜遺骨納骨堂・十字架の塔
※筆者撮影

「死の鉄路」をたどり「地獄船」で日本に強制連行されたvan Heekerenらオランダ人捕虜は，門司港到着後に再び生死にかかわる岐路に立たされた。そのなかでも，もっとも生存可能性が高い捕虜収容所にvan Heekerenは偶然移送されたため，戦後のタイとインドネシアにおける先史考古学発展の前途がかろうじて断ち切られずに済んだ状況であった。

このようにして，van Heekerenは，1945（昭和20）年８月15日の大日本帝国降伏と約３年半におよぶ奴隷的境遇からの解放の日を，福岡県中間市中鶴でむかえた。

６．解放後の歩みと採集資料の波紋

大日本帝国の降伏後，進駐アメリカ軍によって，van Heekerenは他のオランダ人捕虜とともに，1945年９月19日に捕虜収容所から解放された。そして，アメリカ陸軍航空隊（U. S. Army Air forces）により，９月21日にフィリピンのマニラの医療キャンプへ移送された（van Heekeren 1948：24頁）。当時の他のオランダ人捕虜の証言によると（林　1987・1991・2000，武富・林　2000），多くの場合長崎と沖縄を経由してフィリピンに移送され，医療キャンプで療養看護を受け，あわせて日本側の戦犯容疑者に関する聞き取り調査が行われたよ

うである。

療養滞在中の van Heekeren は，同じく日本軍の収容所から解放されたフィリピン考古学の創始者であるフィリピン大学 Henry Otley Beyer（ヘンリー＝オートリー＝ベイヤー）教授と，1945年10月にマニラで面会することができた（van Heekeren 1948：24頁，Beyer 1951：16頁）。van Heekeren は，タイでの採集資料８点を持参し，適切な時期が到来するまで，それらの資料の安全な保管を Beyer に託した。インドネシア独立革命勃発に伴い，van Heekeren は宗主国のオランダ軍への再応召が決定しており，これらの貴重な採集資料を戦地で失うことを恐れたためであった（van Heekeren 1948：24頁，Beyer 1951：16頁，Bakker 1960）。なお，この時のオランダ軍の召集は，同時期に日本国内で捕虜であったオランダ人に共通で，福岡県水巻町の福岡俘虜収容所第６分所にいた Dolf Winkler によれば，除隊後の公務員職が保証されている兵役応召か懲役刑かの選択を迫られていたとのことである（林　1987：246-247頁）。

van Heekeren はおもにインドネシアのボルネオ島とスラウェシ島で兵役後，1946年10月に無事除隊され，スラウェシ島のマカッサル（Makassar）市にあるオランダ領東インド考古局（後のインドネシア考古局）に先史考古学者として職を得たことを Beyer に連絡した（Beyer 1951：16頁）。そして，1947年には，アメリカのハーヴァード大学のピーボディー考古学・民族学博物館（Peabody Museum of Archaeology and Ethnology）で世界の旧石器時代研究を先導していた Hallam Leonard Movius, Jr.（ハーラム＝レオナルド＝モヴィウス＝ジュニア）学芸員・教授に，ミャンマーやマレーシアの旧石器時代前期の石器群とタイでの採集資料の比較研究を依頼することを決めた。そこで，依頼を受けたフィリピンの Beyer は，Beyer の指導によりフィリピン考古学に関する研究で修士号を取得したイエズス会の Francis X. Lynch 師のアメリカ帰国時に資料を託し，1949年にピーボディー考古学・民族学博物館に送り届けることができた（Beyer 1951：16頁）。その結果，van Heekeren の泰緬鉄道建設日本軍捕虜時代のタイでの採集考古資料全８点は，ハーヴァード大学のピーボディー考古学・民族学博物館所蔵品となり（van Heekeren and Knuth 1967：17頁），現

図12　ハーヴァード大学ピーボディー考古学・民族学博物館所蔵 van Heekeren 採集資料　出典：（https://peabody.harvard.edu/）　※註17）参照

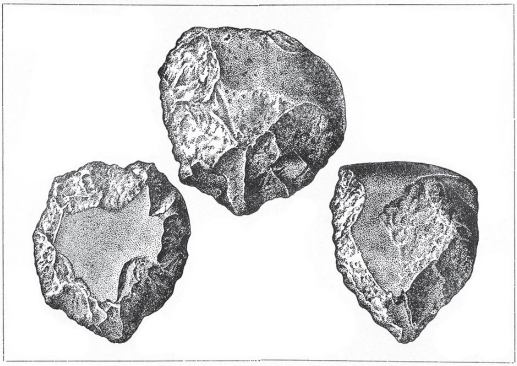
在に至っている（図12）[17]。

van Heekeren のタイでの採集資料に関する研究成果の公表は，1947年から開始された。最初に，1947年１～２月に『Chronica Naturae』誌で「シャムにおける石器時代の発見」（van Heekeren 1947a）と題して，ごく簡潔に発見の概要が報告された。そして，1947年４月に『The Illustrated London News』誌に，van Heekeren の研究成果とその経緯を，初めて採集石器の図入りで一般向けに記者が編集した「考古学の冒険物語：死の鉄道から石斧」（図４）と題する記事（van Heekeren 1947b）が掲載された。そして，1948年には，採集資料の特徴と東南アジア先史考古学の観点からもっとも詳細に考察した調査研究報告「シャムにおける先史時代の発見：1943～44年」（van Heekeren 1948）が，『Proceedings of the Prehistoric Society』誌で公表された（図６・７）。

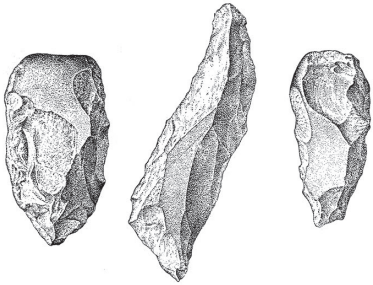
なお，van Heekeren によるこれらの研究成果の取りまとめ公表とは別に，

Beyer も van Heekeren のタイでの発見について独自に紹介している。1948年12月に，Beyer の主著のひとつでフィリピン考古学最初の体系的な概説書である『フィリピンと東アジア考古学および太平洋諸島民の起源との関連性』（Beyer 1948）において，「H. R. van Heekeren がシャムの更新世堆積物中から発見した旧石器時代後期または中石器時代の〈ホアビニアン文化〉型の石器」として，簡潔に図示紹介している（Beyer　1948：125頁，Fig.　4）（図13a）。その後，van Heekeren のおもにインドネシアにおける調査研究成果を詳しく紹介する論文「スラウェシなどにおける H. R. van Heekeren の考古学関連調査（1937–1950年）に関する覚書」（Beyer 1951）中で，改めてタイにおける採集資料を詳しく紹介している。そのなかでは，これまで van Heekeren 自身による報告論文も含めて，一度も図化されていなかった新石器時代の２点目の磨製石斧も初めて図示した（Beyer 1951：Fig. 3）（図13c 左）。また，ワンポー（Wan-Po）付近の洞窟内から採集された石器と，バーンカオ（Ban-Kao）村周辺から採集され van Heekeren が旧石器時代前期のフィンノイアン（Fingnoian / Fingnoi）文化とした片面加工礫器の間で，加工程度や石材に強い共通性がみられることに注意し，いずれも共通の文化に属する可能性を示唆している（Beyer 1951：17頁）。引用されている文献などから，Beyer によるこの1951年の論文は，おそらく当時の郵便事情の困難さや出版の遅れなどの事情もあり，van Heekeren の新たな報告（van Heekeren 1947b・1948）と，Movius による van Heekeren 採集資料の評価を含む新著（Movius 1949）を実見していない段階の見解であった。

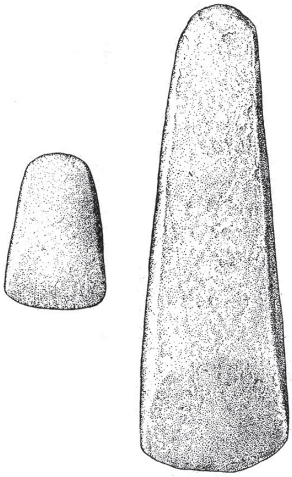
そして，van Heekeren が待ち望んでいた Hallam L. Movius, Jr. による比較研究成果が，1949年に明らかにされた。この分野では，現在でも重要な古典的研究となっている『南・東アジアにおける旧石器時代前期文化』（Movius 1949）が刊行されたのである。このなかで Movius は，van Heekeren がバーンカオ（Bhan-Kao＝Ban-Kao）村周辺で採集した Fingnoian 文化と名付けた石器が，旧石器時代前期のミャンマーにおけるアニャティアン（Anyathian / Anyatha）文化初期の石器群と型式学的に類似することを追認した。更新世中期におけるアフリカ・西アジア・ヨーロッパ・インド亜大陸における握斧（Hand-Axe）文



a．　*Fig.* 4: Late palaeolithic or Mesolithic implements, of the "Hoabinhian" type, found by H. R. van Heekeren in Pleistocene deposits in Siam.



b．　FIG. 2



c．　FIG. 3

図13　Beyer による van Heekeren 採集資料紹介
出典：a.（Beyer 1948：Fig. 4），b・c（Beyer 1951：Fig. 2・3）

化と，東アジア・東南アジアにおける片面加工礫器・両面加工礫器（Chopper / Chopping Tool）文化の分布並存に関する Movius の仮説を補強する傍証として位置づけられたのである。そして，その発見の重要性から，将来における現地のさらなる詳細な調査実施に期待している（Movius 1949：404-406頁）。

Movius の期待は，考古学・文化人類学専攻で Movius の指導を受けてハーヴァード大学を卒業したばかりの Karl Gustav Heider（カール＝グスタフ＝ハイダー）が実現することになった。Heider は，ハーヴァード大学から調査旅行資金とバンコクの国立博物館の協力を得て，van Heekeren の泰緬鉄道建設現場での考古学的発見場所周辺の現地確認調査を，1956年10月～11月に３週間かけてタイのカーンチャナブリー（Kanchanaburi）県で実施した。戦後最初期のタイにおける先史考古学調査である。その結果，van Heekeren が資料を採集したと推測されるバーンカオ（Bhan Kao）と一駅上流側のターキレン（Tha Ki Len）周辺の８地点（Heider が名づけた Kan１・２・３・４・５・９・10・11地点）から，片面加工礫器104点と剥片石器４点を採集した（Heider 1960：63頁）（図14）。Heider は，かなり広範囲に点在する採集地点にもかかわらず，特にこれらの片面加工礫器の加工状況・風化度合い・石材などの似通った特徴から，これらを文化的・時期的に区別することが困難であることを指摘している。特に円礫片面の周縁部全周に付刃加工する石器群（扁平な円礫の片面全面に同様の加工を行った「スマトラ型石器 Sumatralith」を含む）は，中石器時代のホアビニアン／ホアビン（Hoabinhian / Hoabinh）文化型の石器群であることを確認している。そのうえで，その他の採集石器の大部分を占める礫尖端部分のみの片面加工礫器や長側縁のみの片面加工礫器については，旧石器時代前期に位置づけることを妥当としながらも，中石器時代に属する可能性も慎重に残している（Heider 1960：66頁）。なお，van Heekeren は，バーンカオ（Ban-Kao）駅周辺で新石器時代の方角磨製石斧を２点採集している。この Heider の調査では，地元住民からの情報提供もあり，この地域の新石器時代の拠点的な遺跡であるバン（Bang）遺跡の位置も特定できた（Heider 1957：65頁）。これが，タイで最初の新石器時代大規模遺跡の発見で，なおかつ現在もタイを代表する世

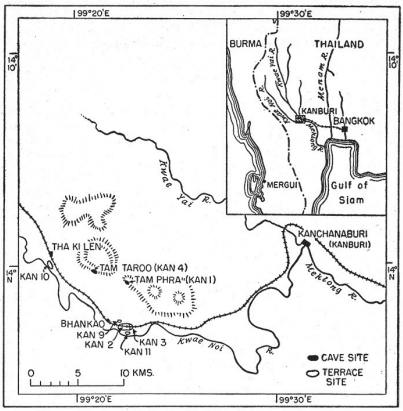
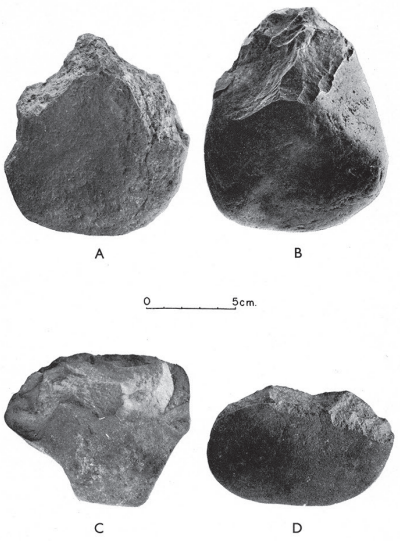


FIG. 1. Map showing the location of pebble-tool sites on the Kwae Noi River near Bhan Kao, Kanchanaburi Province.

The eight pebble-tool localities referred to are:

KAN 1. Tam Phra, a small cave 3 kilometres NNE. of the Bhan Kao railway station.
KAN 2. An extensive area of gravel exposures from 1 to 3 kilometres east of the Bhan Kao railway station, on either side of the railway.
KAN 3. At first considered separate, later observed to be the easternmost portion of KAN 2 exposures.
KAN 4. Tam Taroo, a large cave 7 kilometres NNW. of the Bhan Kao railway station.
KAN 5. The pebble ballast of the railway west of Bhan Kao, origin uncertain.
KAN 9. A small gravel exposure about 1 kilometre ENE. of the Bhan Kao railway station.
KAN 10. An extensive gravel deposit quarried for railway ballast, from which runs an abandoned railway spur 2 kilometres NW. to Tha Ki Len, 10 kilometres west of Bhan Kao.
KAN 11. Gravel exposures SE. of Bhan Kao, between the Kwae Noi River and the railway at the point of the sixth telegraph pole of the 130th kilometre from Bangkok. (Each of these iron poles bears a number in white paint.)



Pebble-tools from the terrace of the Kwae Noi Rive near Bhan Kao, Kanchanaburi Province, Thailand

図14　Heider のクウェーノーイ河流域遺物採集地点と採集石器
出典：(Heider 1960：64頁 Fig. 1・Pl. 1)

界的に著名な新石器時代の集団埋葬遺跡バーンカオのバン遺跡の本格的な発掘調査につながる成果となった。また，バーンカオ駅からさらに三駅上流側のワンポー（Wang Po）近くでも，地元住民からの情報提供で，新遺跡が確認された。クウェーノーイ（Kwae Noi）河岸の高台にある Panakit 有限会社の製材所敷地内に，新石器時代後期～金属器時代に属するとみられる甕棺墓などを特徴とする「製材所（Sawmill）」遺跡が発見され（Heider 1957：68頁），後に van Heekeren らが発掘調査を実施することになった。

なお，泰緬鉄道とイギリス軍を中心とする連合軍捕虜の強制労働状況を描いた1957年公開の映画として，「戦場にかける橋」（原題：The Bridge on the River Kwai・監督：David Lean）がよく知られる。そして，Karl G. Heider が，van Heekeren が鉄道建設作業中に旧石器時代の石器を発見する場面を，この映画の撮影の際に演じたとされる。しかし，最終的に映画の完成版ではその場面が

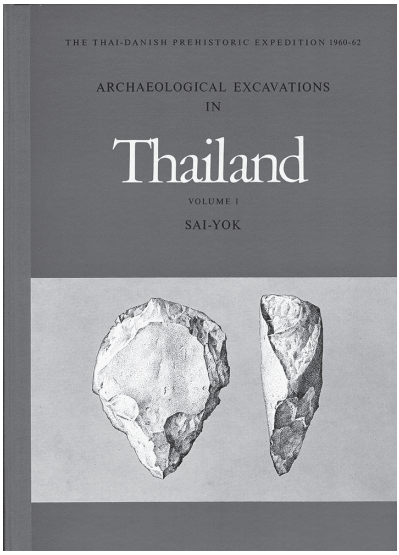
省略されてしまったという（Soejono 1976：109頁）[18]。

その後，Heider による現地の確認調査結果を受けて，van Heekeren も参加してタイ考古学では初となる本格的な発掘調査が，ついに実施されることになった。1959年にタイとデンマークの間で考古学の国際合同調査の実施が協議され，クウェーノーイ（Kwae Noi）河流域を対象とすることが決まったため，van Heekeren の現地と東南アジア考古学に関する広範な見識が必要とされたのである。旧石器時代前期の遺跡も視野に入れられていたが，1960年の予備調査によって有望な遺跡が検討された結果，Bang 遺跡などの Ban-Kao 周辺の遺跡と，新たに確認されたサイヨーク（Sai-Yok）I 岩陰遺跡が発掘調査実施対象にしぼられた。そして，1961～1962年に両遺跡の本調査が実施された。

Sai-Yok I 岩陰遺跡は，Ban-Kao から約80km 上流側に位置し，van Heekeren はこの遺跡の発掘調査を主担当した。岩陰内と前庭部斜面の調査の結果，中石器時代から青銅器時代までの三層に分けられる文化層の堆積が確認された。最下層は，中石器時代の Hoabinhian 文化に相当する先土器礫器文化層で，石器製作址と墓葬などが検出され，おおまかな最古の年代観として紀元前8000～10000年が想定された。その上位には，新石器時代の文化層が堆積し，墓葬とそれらに伴う甕形・台付鉢形などの多量の土器・各種磨製石斧・紡錘車などが出土した。そして，最上層の青銅器時代の文化層からは青銅製鈴・小形（ミニチュア）土器などが出土している。なお，地表面では歴史時代の陶磁器や仏像などの散布も確認されている（van Heekeren and Knuth 1967）。

Ban-Kao では，Bang 遺跡と近隣の LueⅡ遺跡の二箇所が発掘調査され，Bang 遺跡からは44基・LueⅡ遺跡からは２基の墓葬が検出された。それらとともに著名な三脚付き鉢形土器をはじめとする多数の土器・磨製石斧・骨製銛頭・玉類などが出土している。また，鉄斧を伴う例が一部あることから，鉄器時代の墓葬も含むとしている（Sørensen 1967）。

なお，これらの調査の一環で，van Heekeren らは，青銅器時代の「製材所（Sawmill）」遺跡や，クウェーノーイ河上流部で新たに発見されたおもに中石器時代と新石器時代の Chande IIA・B 洞窟遺跡の小規模な発掘調査も実施して



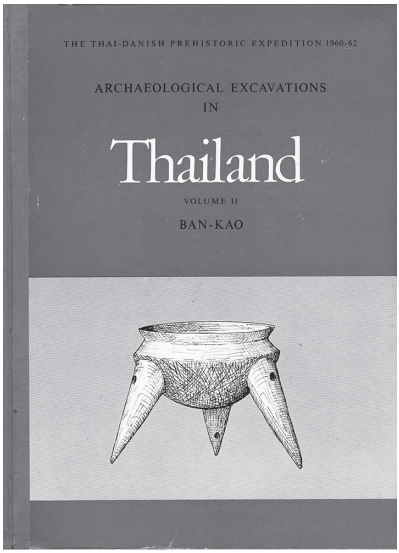


図15　Sai-Yok I 岩陰遺跡と Ban-Kao 周辺遺跡の発掘調査報告書表紙
出典：（van Heekeren and Knuth 1967, Sørensen 1967）

いる。しかし，van Heekeren が執筆したその調査報告書（van Heekeren 1988a・b）は，没後の1988年になって出版された。

泰緬鉄道建設に伴う強制労働のさなかに秘かに行われた van Heekeren の考古学的探究は，タイで最初の本格的発掘調査の実施と，現在もタイの中石器時代と新石器時代をそれぞれ代表する Sai-Yok I 岩陰遺跡と Ban-Kao 周辺遺跡の詳細な学術発掘調査報告書（van Heekeren and Knuth 1967, Sørensen 1967）（図15）の刊行というかたちで大きく結実した[19]。

戦前・戦後の東南アジアでは，最古の人類の痕跡を求めて，旧石器時代前期の遺跡の探索に特に関心が集まっていた。Hallam L. Movius, Jr. による旧石器時代前期に関する代表的な研究報告（Movius 1944・1949）前後頃に確認された主要な遺跡・文化例としては，以下があげられる。ミャンマーのアニャティアン（Anyathian / Anyatha）文化（de Terra and Movius 1943），インドネシアのパチタニアン・パジタニアン（Pacitanian・Patjitanian / Pacitan・Patjitan）

文化（Bartstra 1976 など），マレーシアのタンパニアン（Tampanian / Kota Tampan）文化（Sieveking 1960 など），フィリピン Cagayan 渓谷のカバルワニアン（Cabalwanian）文化（von Koenigswald 1960 など），そしてヴェトナムのド山（núi Đọ）遺跡（Phạm・Lưu 1973）も加わった。このようななかで，タイにおける最古の人類に関連する van Heekeren によるフィンノイアン（Fingnoian / Fingnoi）文化（van Heekeren 1948）の指摘が，Ban-Kao 村周辺とクウェーノーイ河流域を戦後のタイ考古学最初の本格的調査研究対象にした大きな要因でもあった。しかし，現在では，これらの多くの文化の年代観や遺跡の性格をめぐって，フィンノイアン文化と同様に，さまざまな慎重な解釈がみられる（例：Bellwood 1997）。

van Heekeren により旧石器時代前期のフィンノイアン文化とされた石器群について，現在では中石器時代のホアビニアン文化の石器として位置づける理解（Charoenwongsa and Bronson eds. 1988：22頁）が有力である。そして，引き続き旧石器時代前期の遺跡の探究も継続されている。近年ではタイ北部 Lampang 県の Ban Mae Tha 遺跡・Ban Don Mun 遺跡・Khao Pah Nam 遺跡出土の砂岩製の片面加工・両面加工礫器（Higham and Thosarat 2012：29–30頁）が，タイ最古級の石器群として代表的である。当初70万年以前（Higham and Thosarat 2012：30頁）とされていたが，Ban Don Mun 遺跡の地質年代の再検証結果（Zeitoun et al. 2013）から，現在は約55万年前以降の石器群と推測されている。古人類の出現にかかわるタイ国内最古級の年代値となっている。

まとめ：アジア・太平洋戦争中の東南アジアと日本の考古学者たち

1945年に捕虜生活から解放され，フィリピンを経てインドネシアに戻った van Heekeren は，自身が不在期間の日本軍占領下の生まれ故郷や職場の街で，どのような残酷なできごとがあったか知ることになったはずである。van Heekeren の生まれ故郷のスマラン（Semarang）では，占領日本軍高級将校らによる，抑留中のオランダ民間人女性の大規模で計画的な拉致と慰安所への強制連行事件

である「スマラン事件」が起きていた（梶村・村岡・糟谷　2008：103-145頁）。また，勤務先の農園があったジェンベル（Jember）でも，日本軍の憲兵隊による農園勤務のオランダ民間人女性の慰安所への強制連行事件と，検挙者男女多数の飢餓・拷問死事件である「ジョンベル憲兵隊事件」があった（茶園編　1992：115-116頁）。それぞれの土地の限られたオランダ人入植者人口を考慮すると，事件の被害者に van Heekeren の親しい人物などが含まれていた可能性も否定できない。

アジア・太平洋戦争中の東南アジアでは，van Heekeren 以外にも多くの考古学者が研究と人生を翻弄された。解放後の van Heekeren とマニラで面会し，その後の資料の保管とアメリカのピーボディー博物館への安全な移送に貢献した H. Otley Beyer もその一人である。日本軍に占領されたフィリピンでは，Beyer の所属するフィリピン大学の人類学科は閉鎖された。しかし，台湾考古学の先駆者の一人として知られる鹿野忠雄（かのただお）が占領日本軍の教育部門の軍属にいたため，Beyer の研究活動継続と貴重な収集考古民族資料の保全に鹿野が尽力した。しかし，最終的に Beyer も，1944年９月から1945年２月まで，Santo Tomas 大学内に設けられた強制収容所に収容された。その間に，フィリピン大学内の人体計測器具などの高価な機器類が日本軍に略奪され，同時期に考古資料類も失われたという（Melendez and Caccam 1967：12-13頁）。なお，日本軍占領当初のマニラ大学では，寄宿舎に取り残された離島部出身の女子大学生たちが「日本の将校のえじきになった」ことを，フジサンケイグループ議長の鹿内信隆（しかないのぶたか）が犯行当事者から当時直接聞いた「面白い」話として戦後に語っている（櫻田・鹿内　1983：29-30頁）。そして，戦争末期のマニラでは，占領日本軍による市民を巻き込んだ市街戦により，住民10万人が犠牲となり，町も完全に破壊された（池端編　1996：17頁）。日本国内各地の古人骨研究を主眼に多くの先史遺跡調査に関わった三宅宗悦（みやけむねよし）も，軍医として戦闘に参加していたフィリピンのレイテ島で1944年に戦死している（山崎　1992：274頁）。

台湾の先史文化に関する最初の文化編年（鹿野　1946：下巻176-183頁）を提示した鹿野忠雄は，フィリピンでの軍務の後に，1944年８月にボルネオ島北

部へ陸軍専任嘱託として派遣された。そして，戦争末期に戦闘任務への招集命令を無視したために，鹿野忠雄は日本軍の憲兵隊に拘束後撲殺された可能性が高いとされる（山崎　1992：310-313頁）。

鹿野忠雄と同時期のボルネオ島には，日本軍に対して現地住民とともにゲリラ戦で対抗していたイギリス軍特殊工作部隊の Tom Harrisson（トム＝ハリソン）がいた。戦後妻の Barbara Harrisson とともに Tom Harrisson は，マレーシアのサラワク州立博物館を拠点に，同島を代表する先史時代の著名な Niah（ニア）洞穴遺跡の発掘調査を長期にわたって実施した（山崎　1992：314-320頁，Heimann 1997）。

鹿野忠雄が去った後，敗戦間際の台湾に配属された日本兵のなかには，考古学者の坪井清足（つぼいきよたり）がいた。坪井は，非番の時間を利用して，日本軍の対戦車壕掘削による破壊で断面が露出していた鳳鼻頭遺跡（貝塚）の層序を観察し，下層に彩陶片・上層に黒陶片が含まれていることを確認した（Tsuboi 1956，坪井　1986：50頁）。戦後の坪井清足は，奈良国立文化財研究所を拠点に，国内の埋蔵文化財行政調査体制の整備や行政による遺跡保護活用実現に貢献した。

なお，van Heekeren が日本で抑留されていた同時期に，もう一人のオランダ人考古学研究者も国内に抑留されていた。キリスト教の神言修道会の Gerard J. Groot（ジェラード＝グロート）神父は，1940（昭和15）年に千葉県市川市姥山貝塚（C 地点）の発掘調査を実施した。Groot 神父は，1942（昭和17）年12月以降，埼玉県さいたま市浦和区のフランシスコ会北浦和修道院を接収して設置した埼玉抑留所に敵国人として収容された。解放後，千葉県市川市に私設の日本考古学研究所を立ち上げた。多くの日本人研究者と協力して縄文文化研究の戦後の再出発に貢献し，姥山貝塚の詳細な発掘調査報告書の刊行などを行った（領塚　2008）。

日本国内の多くの考古学者は，戦前戦中の大日本帝国の全体主義・軍国主義に無抵抗であった。その数少ない例外に，考古学・民俗学の研究者であった赤松啓介（栗山一夫）がいた。唯物論研究会関連での考古学の研究活動が政府による弾圧対象となり，赤松啓介は1939（昭和14）年11月に逮捕された。そして，

赤松は，戦前の法律でも厳禁されていたはずの拷問が，実際には横行していたことを，自身の体験を基に記している。深夜に警察の武道場で椅子に拘束され，３・４名の刑事に取り押さえられながら，指先の爪の下側に熱した針を突き刺される拷問を受けている。殴る蹴るなどは，拷問のうちには入らないほど一般的であったという。また，指と指の間に鉛筆をはさんで締めつける拷問や，「鉄砲かつぎ」・「海老責め」などの拷問もあったとされる（赤松　1967：42-45頁）。赤松は，憲兵隊と特別高等（特高）警察の両方の拷問を経験し，その違いについても述べている。憲兵の拷問は派手で死亡率が高いが，特高は「生かさず，殺さず」で残虐性が強かった。しかし，それでも，朝鮮・中国・東南アジアなどでの警察・日本軍による拷問に比べれば，日本人に対しては「同じ陛下の赤子」という意識で手加減されたものであったと認識している（赤松　1967：44頁）[20]。

日本軍捕虜時代の van Heekeren によるタイでの考古学的発見について，泰緬鉄道建設に関わった戦後の元日本軍兵士が，「予測もできなかった大きな功績」として，悲劇中の美談的に紹介した事例（清水　1978：246頁）がある。泰緬鉄道建設関係の元日本軍兵士には，個人として戦争責任を深く自覚して戦後に行動し続けた永瀬隆がよく知られる。永瀬隆は，元連合軍捕虜やアジア人労務者との和解を求め，長年にわたってタイ現地などを訪問し続けた。そして，靖国神社に泰緬鉄道 C56 機関車を奉納して鉄道建設を日本軍の功績とし，関係諸部隊を免罪する泰緬鉄道建関係者の動きがあったことを，永瀬は厳しく批判していた（永瀬　1986：59-60頁）。現在靖国神社遊就館１階玄関ホール内に展示されている泰緬鉄道 C56 型31号機関車の解説には，泰緬鉄道が「驚異的な速さで完成」したことを強調する一方で，鉄道建設の際に多くの犠牲者が出たことなどにはまったく触れられていない（片山　2019：58頁，東京の戦争遺跡を歩く会編　2006：30頁）。歴史修正（歴史否認）主義的意図が明白である。

しかし，これらの「美化」の背景には，泰緬鉄道建設旧日本軍関係者の歴史修正主義的願望ばかりでなく，旧日本軍兵士自身の一般認識のゆがみも反映していると考えられる。たとえば，当時の日本軍兵士の行動規範であった『戦陣

訓』中の「生きて虜囚の辱めを受けず」という認識は，連合軍捕虜を蔑視・虐待する要因であったとみられる（片山　2019：49-51頁）。そもそも，「虜囚」となることを全否定するような考えそのものが，日本中近世史の多くの著名な歴史的事実をも無視した稚拙な「歴史修正」で，創られた「伝統」でもある。また，連合軍捕虜と個人的に良好な関係を築いていた日本軍兵士がいたとしても，囚人と看守の関係に類する圧倒的に不平等な人間関係こそが，重要な本質的構造である。そして，連合軍捕虜もしばしば目撃した，日本軍内で日常的に横行していたビンタ・殴打・拷問などの暴力がある（内海・マコーマック・ネルソン編　2023：38-39頁）。日本軍内部では日常的な古参兵などによる初年兵への暴行や，極端な精神主義による食糧・装備などの補給軽視の考え方が横行し，その結果膨大な餓死者や戦病死者を出した（吉田　2017）。たとえば，吉田裕の日本軍兵士に関する研究では，Beyer のいたフィリピンにおける日本陸軍の戦没者の約65～60％が餓死を主体とする病没であった統計が示されている（吉田　2017：32頁）。これらの日本軍兵士をめぐる基本的人権が極端に侵害されていた状況は，その捕虜となっていた連合軍兵士の属する軍隊や社会と大きく異なっていた部分である[21]。泰緬鉄道建設に動員された捕虜のイギリス軍兵士 Ernest Gordon（アーネスト＝ゴードン）は，戦争末期にビルマ（ミャンマー）からタイに敗退移送途中の多数の日本軍負傷兵が，まともな医療処置すら施されない劣悪な状況で列車内に放置されていたことを目撃している。そして，日本軍が自軍の兵士にさえも残酷であったことが，捕虜に対する残酷な扱いにそのままつながっていたことを見抜いている（斎藤訳　1995：382-383頁）。van Heekeren は，このような大日本帝国と日本軍のなかで，約３年半ものあいだ捕虜として死線をさまよった末に生還したのである。

大日本帝国によるアジア太平洋各地への侵略戦争は，国内外のさまざまな考古学者の研究と人生を巻き込み理不尽に翻弄した。そして，心身に深い傷や喪失感を負いながらも生死を分かつ偶然でかろうじて生き延びた人たちにより，戦後の考古学は再出発し現在に至っている。そのことを，Hendrik Robert van Heekeren 博士（1902-1974年）没後50年にあたり，あらためて記憶しておきたい。

謝　辞

本稿執筆にあたり，泰緬鉄道全般に関して，西南学院大学片山隆裕教授より現地で詳しくご教示を賜りました。また，戦時中の福岡県中間市における捕虜と収容所に関して，加来歯科医院加来千里院長と中間市教育委員会生涯学習課吉田浩之氏より懇切なご教示を賜りました。末筆ながら厚く御礼申し上げます。

註

1) 日本軍政期のインドネシアにおける考古学と遺跡保護関係では，ジャワ島プランバナン（Prambanan）遺跡群のロロ＝ジョングラン（Roro Jonggrang）寺院遺跡は，オランダ領東インド政府考古局のオランダ人技術者などによってすでに着工中の修復工事の継続を認めた。しかし，戦争末期の段階では修復工事も中断放棄状態になっていたとされる。また，ジャワ島のボロブドゥール（Borobudur）遺跡では，地域の軍政で文教・宗務担当の古沢安二郎が東南隅部の地下旧基壇の発掘を行っている（千原　1969：102-104 頁，坂詰　1997：161・164-165 頁）。

2) 泰緬鉄道（タイ王国）関係地名の日本語カタカナ表記は，吉川利治の研究（吉川　2011）を参考にした。

3) ちなみに，泰緬鉄道関係の遺構・遺物そのものも，すでに考古学的探究が課題になっている。たとえば，泰緬鉄道博物館（The Thailand-Burma Railway Centre）学芸員の Rod Beattie や捕虜遺族により，廃線になった区間の現存遺構やその周辺に散布する残存遺物の探索が行われている（Beattie 2015a・b, Fryer 2018）。

4) 日本軍による捕虜に対する拷問と似た私刑・拷問例は，世界記憶遺産に登録された山本作兵衛筆の福岡・九州の炭鉱記録画でも見ることができる（森本ほか編　2008：58 頁図版 289・290，60 頁図版 301-306，110 頁図版 572，111 頁図版 576，112 頁図版 581-584）。

5) 泰緬鉄道博物館（The Thailand-Burma Railway Centre）学芸員の Rod Beattie によれば，アジア人労務者はビルマ人・中国人・ジャワ人・マレー人の合計 177900 人で，そのうち死者は合計 85425 人（＝死亡率 48.02％）と推計している（Beattie 2015b：41 頁）。

6) van Heekeren の泰緬鉄道建設強制労働中の考古学的探索については，後年の下記自伝中の 51-57・67・145・165 頁でも言及されているが（Bloembergen and Eickhoff 2015：144 頁註 47），今回原本を入手できなかったため，内容を確認できなかった。

van Heekeren, H. R. 1969 *De onderste steen boven*, Van Gorcum (Assen)

また，van Heekeren も中心的に参加した戦後の同地域におけるタイ・デンマーク合同考古学調査成果報告書に関する瀬戸口烈司による書評（瀬戸口　1969）が，van Heekeren の泰緬鉄道建設強制労働中の考古学的探索について，日本国内で最初に比較的詳しく紹介した例である。

7) バーンカオ（Ban-Kao）における 1943 年 3 月～4 月のオランダ人捕虜の状況については，日本軍による 1942 年～1945 年までの各地のオランダ人捕虜と収容所の状況などをまとめた「Japanse krijgsgevangenkampen」中の泰緬鉄道関係収容所一覧の〈Ban kao〉の記事（https://japansekrijgsgevangenkampen.nl/Bankao.htm）を，参考にした。

8) 帝亜丸と捕虜移送状況に関しては，日本軍による 1942 年～1945 年までの各地のオランダ人捕虜と収容所の状況などをまとめた「Japanse krijgsgevangenkampen」中の捕虜移送船〈Teia Maru 2〉の記事（https://japansekrijgsgevangenkampen.nl/Teia%20Maru%202.htm）を，参考にした。

9) 捕虜たちの後の回想では，帝亜丸の門司港到着は，6 月 15 日～6 月 19 日までと記憶に違いがある（註 10 参照）。これは，船倉内に閉じ込められていたことで，捕虜たちの日付の感覚が混乱していたことが要因と考えられる。なお，これらの日付に近い門司港周辺の空襲は，日本本土最初の空襲とされる 1944（昭和 19）年 6 月 16 日未明の北九州空襲である（小野編　2016：113-114 頁）。

10) 帝亜丸下船後の福岡俘虜収容所各分所への分配移送人数については，日本軍による 1942 年～1945 年までの各地のオランダ人捕虜と収容所の状況などをまとめた「Japanse krijgsgevangenkampen」中の捕虜移送船〈Teia Maru 2〉の記事（https://japansekrijgsgevangenkampen.nl/Teia%20Maru%202.htm）を，参考にした。

11) 帝亜丸で門司港に到着し，福岡俘虜収容所第 21 分所に収容されたオランダ人捕虜の名簿は，日本軍による 1942 年～1945 年までの各地のオランダ人捕虜と収容所の状況などをまとめた「Japanse krijgsgevangenkampen」中の〈Teia Maru-Fukuoka21B naamlijst〉と〈Fukuoka 21B，Nakama〉の表（https://japansekrijgsgevangenkampen.nl/Teia%20Maru%20Fukuoka%2021B.htm）・（https://www.japansekrijgsgevangenkampen.nl/Naamlijst%20Fukuoka%2021B.htm）を，参考にした。

12) 中間の福岡俘虜収容所第 21 分所については，日本軍による 1942 年～1945 年までの各地のオランダ人捕虜と収容所の状況などをまとめた「Japanse krijgsgevangenkampen」中の〈Fukuoka 21B, Nakama〉の記事（https://www.japansekrijgsgevangenkampen.nl/Fukuoka%2021B.htm）を，参考にした。

13) 日本降伏時の福岡俘虜収容所第 21 分所の捕虜収容人数については，POW 研究会福林徹による「日本国内の捕虜収容所」の〈福岡俘虜収容所　中間分所〉の記事（http://www.powresearch.jp/jp/archive/camplist/#fukuoka）を，参考にした。

14) H. R. van Heekeren の日本での捕虜時代については，後年の下記自伝中の 58-60 頁でも触れられているが（註 12 参照），今回原本を入手できなかったため，内容を確認できなかった。
van Heekeren, H. R. 1969 *De onderste steen boven*, Van Gorcum (Assen)

15) 日本降伏時の福岡俘虜収容所各分所収容捕虜の生存者数と死者数は，POW 研究会福林徹「日本国内の捕虜収容所」の〈福岡俘虜収容所〉（http://www.powresearch.jp/jp/archive/camplist/#fukuoka）記事を，参考にした。

16) ソ連邦スターリン政権による日本兵シベリア抑留者数と死者数は，厚生労働省「シベリ

ア抑留中死亡者に関する資料の調査について」（https://www.mhlw.go.jp/seisaku/2009/11/01.html）を，参考にした。

17) 出典：ハーヴァード大学ピーボディー考古学・民族学博物館（https://peabody.harvard.edu/）所蔵資料番号（Object Number）：49-45-60/9762.1, 9762.2, 9762.3, 9763.1, 9763.2, 9763.3, 9764.1, 9764.2

18) Karl G. Heider の映画「戦場にかける橋」出演経験については，以下の Web 上の記事でも紹介されている。
Conrad, Cyler 2021「An Archaeologist on the Railroad of Death」https://www.sapiens.org/archaeology/hendrik-robert-van-heekeren/

19) van Heekeren の最初の発見を受けて Karl G. Heider と Per Sørensen が行った Ban Kao 地区における遺跡分布調査の成果（Heider 1960, Sørensen 1967）を基に，その後 Surin Pookajorn が Hoabinhian 文化の遺跡と民族考古学的調査成果との比較研究を目的として，Ban Kao 地区の 4 箇所の洞窟遺跡の発掘調査を実施している（Pookajorn 1988：83-185 頁）。

20) 大日本帝国政府の特別高等（特高）警察や憲兵隊による一般市民への拷問・虐殺やその法医学的検証結果は，たとえば以下の文献が詳しい。
荻野富士夫　2012『特高警察』，岩波新書 1368，岩波書店（東京）
米原昶・風早八十二・塩田庄兵衛　1977『特高警察黒書』，新日本出版社（東京）
上杉朋史　2020『西田信春：甦る死』，学習の友社（東京）
大島英三郎編　1984『大杉栄追想／大杉・野枝・宗一死因鑑定書』，黒色戦線社（東京）

21) 大日本帝国はナチスドイツ（第三帝国）と同盟関係であったが，日本軍兵士の状況は，ナチスドイツ軍兵士とも大きな差異がある。そのナチスドイツ占領下のポーランドで，1942 年にユダヤ人大量殺戮作戦を担ったナチスドイツ軍の部隊の一つに第 101 警察予備大隊がある。しかし，Christopher R. Browning の著名な研究成果『普通の人びと（Ordinary Men）』によれば，この部隊の 10～20% の兵士は殺害命令の実行を拒んだが，そのことが理由で特に懲罰などは下されていない（谷訳　2019：130・258 頁）。また，同部隊内での体罰や私刑などに関する証言もない。このような状況は日本軍ではまず想定できないことからも，個人の自由意志や自軍兵士の「人権」さえも軽視する日本軍の特異な性格を理解することができる。

引用・参考文献

赤松啓介　1967「はてしなき泥濘の道　2」,『考古学研究』14 巻 1 号：34-48 頁，考古学研究会（岡山）

池端雪浦編　1996『日本占領下のフィリピン』，岩波書店（東京）

上野英信　1979『火を掘る日日』，大和書房（東京）

内海愛子・G.マコーネック・H.ネルソン編　2023『鉄道と戦争：泰緬鉄道の犠牲と責任』，明石書店（東京）［1994『泰緬鉄道と日本の戦争責任：捕虜とロームシャと朝鮮人と』，明石書店（東京）の増補版］

奥住喜重・工藤洋三・福林歌徹　2004『捕虜収容所補給作戦：B-29 部隊最後の作戦』，大村印刷（山口）

小野逸郎編　2016『北九州の戦争遺跡（改訂版）』，北九州平和資料館をつくる会（福岡）

梶村太一郎・村岡崇光・糟谷廣一郎　2008『「慰安婦」強制連行：［史料］オランダ軍法会議資料×［ルポ］私は“日本鬼子”の子』，株式会社金曜日（東京）

片山隆裕　2019「Death Railway（泰緬鉄道）：「歴史」を正しく学び，紡ぎ，伝えていくために」,『戦争を歩く・戦争を記憶する』：44-62 頁，朝日出版社（東京）

鹿野忠雄　1946『東南亜細亜民族学先史学研究』上下巻，矢島書房（東京）［復刻　1995，南天書局（台北）］

坂詰秀一　1997『太平洋戦争と考古学』，歴史文化ライブラリー 11，吉川弘文館（東京）

櫻田武・鹿内信隆　1983『いま明かす戦後秘史』上下巻，サンケイ出版（東京）

清水寥人　1978「考古学的発掘の端緒をつくった泰緬鉄道」,『遠い汽笛：泰緬鉄道建設の記録』：236-246 頁，あさを社（群馬）

清水寥人編　1978『遠い汽笛：泰緬鉄道建設の記録』，あさを社（群馬）

瀬戸口烈司　1969「書評　“死の鉄道”建設のもたらしたもの：タイ・デンマーク先史学調査隊の報告」,『東南アジア研究』7 巻 2 号：217-225 頁，京都大学東南アジア研究センター（京都）

竹内康人　2018『明治日本の産業革命遺産・強制労働 Q&A：八幡製鉄所・長崎造船所・高島端島炭鉱・三池炭鉱』，社会評論社（東京）

武富登巳男・林えいだい編　2000『異郷の炭鉱：三井山野鉱強制労働の記録』，海鳥社（福岡）

千原大五郎　1969『仏跡ボロブドール：ヒンズー・ジャワの建築芸術』，原書房（東京）

茶園義男　1992『BC 級戦犯和蘭裁判資料・全巻通覧』，不二出版（東京）

坪井清足　1986『古代追跡：ある考古学徒の回想』，草風館（東京）

東京の戦争遺跡を歩く会編　2006『フィールドワーク靖国神社・遊就館：学び・調べ・考えよう』，平和文化（東京）

中尾知代　2022『戦争トラウマ記憶のオーラルヒストリー：第二次大戦連合軍元捕虜とその家族』，日本評論社（東京）

永瀬　隆　1986『「戦場にかける橋」のウソと真実』，岩波ブックレット No.69，岩波書店（東京）
長谷勝弘・濱田学・北原シズ子・須藤ちえ子編　2003『中間の炭鉱史：草創期から終焉まで』，郷土シリーズ②，中間市歴史民俗資料館（福岡）
林えいだい　1987『筑豊俘虜記』，亜紀書房（東京）
林えいだい　1989『消された朝鮮人強制連行の記録：関釜連絡船と火床の坑夫たち』，明石書店（東京）
林えいだい　1991『スケッチ・写真記録　にっぽん俘虜収容所』，明石書店（東京）
林えいだい　2000『インドネシアの記憶：オランダ人強制収容所』，燦葉出版社（東京）
林えいだい編　1990『戦時外国人強制連行関係史料集』1：俘虜収容所，明石書店（東京）
広池俊雄　1971『泰緬鉄道：戦場に残る橋』，読売新聞社（福岡）
増田　弘　2013「日本降伏後における南方軍の復員過程：1945 年～1948 年」，『現代史研究』9 号：1-159 頁，東洋英和女学院大学現代史研究所（東京）
水巻町図書館・歴史資料館編　2006『水巻町十字架の塔』，水巻町図書館・歴史資料館（福岡）
水巻町歴史資料館編　2005『水巻の炭鉱とその暮らし』，水巻町歴史資料館（福岡）
森本弘行ほか編　2008『炭坑の語り部・山本作兵衛の世界：584 の物語』，田川市石炭・歴史博物館／田川市美術館（福岡）
山崎柄根　1992『鹿野忠雄：台湾に魅せられたナチュラリスト』，平凡社（東京）
吉川利治　2011『泰緬鉄道：機密文書が明かすアジア太平洋戦争』，雄山閣（東京）
吉田　裕　2017『日本軍兵士：アジア・太平洋戦争の現実』，中公新書 2465，中央公論新社（東京）
領塚正浩　2008「G. グロート神父と太平洋戦争：抑留された外国人考古学者の動向」，『南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター　2007 年度年次報告書　付編　研究会・シンポジウム資料』：50-55 頁，南山大学人類学博物館（愛知）
Bakker, Giel 1960 Outdekking aan de Kwai : Stenen uit Prehistorie, *Het Vrije Volk : Democratisch-Socialistisch Dagblad*, 08-10-1960 : p. 21, De Arbeiderspers (Rotterdam)
Bartstra, Gerd-Jan 1976 *Contributions to the Study of the Palaeolithic Patjitan Culture Java, Indonesia*, Pt. 1, Rijksuniversiteit te Groningen, E. J. Brill (Leiden)
Bartstra, Gerd-Jan 1997 A Fifty Years Commemoration : Fossil Vertebrates and Stone Tools in the Walanae Valley, South Sulawesi, Indonesia, *Quartär. International Yearbook for Ice Age and Stone Age Research* Bd. 47/48 : pp. 29-50, Institut für Ur- und Frühgeschichte, Friedrich-Alexander-Universität Erlangen-Nürnberg (Erlangen)
Beattie, Rod 2015a *The Death Railway : A Brief History of the Thailand-Burma Railway*, The Thailand-Burma Railway Centre (Kanchanaburi)
Beattie, Rod 2015b *The Thai-Burma Railway : The True Story of the Bridge on the River Kwai*, The Thailand-Burma Railway Centre (Kanchanaburi)

Bellwood, Peter 1997 *Prehistory of the Indo-Malaysian Archipelago*, Revised Edition, University of Hawai'i Press (Honolulu)

Beyer, H. Otley 1948 *Philippine and East Asian Archaeology, and its Relation to the Origin of the Pacific Islands Population*, Bulletin of the National Research Council of the Philippines No. 29, University of the Philippines (Quezon)

Beyer, H. Otley 1951 Notes on the Archaeological Work of H. R. van Heekeren in Celebes and Elsewhere (1937–1950), *Journal of East Asiatic Studies* Vol. 1(1) : pp. 15–31, University of Manilla (Manilla)

Bloembergen, Marieke and Martijn Eickhoff 2015 The Colonial Archaeological Hero Reconsidered : Post-Colonial Perspectives on the 'Discovery' of the Prehistoric Past of Indonesia, In Gisela Eberhardt and Fabian Link eds., *Historiographical Approaches to Past Archaeological Research*, pp. 133–164, Topoi (Berlin)

Browning, Christopher R. 2017 *Ordinary Men: Reserve Police Battalion 101 and the Final Solution in Poland*, Revise ed., Harper Perennial (New York)［谷喬夫訳　2019『普通の人びと：ホロコーストと第 101 警察予備大隊』増補版，ちくま学芸文庫フ-42-1，筑摩書房（東京）］

Charoenwongsa, Pisit and Bennet Bronson eds. 1988 *Prehistoric Studies : The Stone and Metal Ages in Thailand*, Thai Antiquity Working Group, Amarin Printing Group Co., Ltd. (Bangkok)

Colani, Madeleine 1927 *L'age de la Pierre dans la Province de Hoa-Binh (Tonkin)*, Mémoires du Service Géologique de l'Indochine V. 14 Fasc. 1, Imprimerie d'Extrême-Orient (Hanoi)

de Terra, Hellmut and Hallam L. Movius, Jr. 1943 *Research on Early Man in Burma*, Transactions of the American Philosophical Society, New Series Vol. 32 Pt. 3, The American Philosophical Society (Philadelphia)

Fryer, Martyn 2018 *From the Woodlands to the Jungle*, Optima Press (Perth)

Glover, I. C. 1974 The Death of Dr. H. R. van Heekeren, *Indonesia Circle. School of Oriental & African Studies. Newsletter* Vol. 2 (5) : pp. 6–7, Taylor & Francis Group (Milton Park)

Gordon, Ernest 1962 *Through the Valley of Kwai*, Harper & Row (New York)［斎藤和明訳　1995『クワイ河収容所』，ちくま学芸文庫コ-5-1，筑摩書房（東京）］

Hardie, Robert 1983 *The Burma-Siam Railway : The Secret Diary of Dr. Robert Hardie 1942–45*, Imperial War Museum (London)［河内賢隆・山口晃訳　1993『ビルマ ― タイ鉄道建設捕虜収容所：医療将校ロバート・ハーディ博士の日誌』，而立書房（東京）］

Heider, Karl G. 1957 New Archaeological Discoveries in Kanchanaburi, *The Journal of the Siam Society* Vol. 45(1) : pp. 61–72, The Siam Society (Bangkok)

Heider, Karl G. 1960 A Pebble-Tool Complex in Thailand, *Asian Perspectives* Vol.II (2) : pp. 63–67, Hong Kong University Press (Hong Kong)

Heimann, Judith M. 1997 *The Most Offending Soul Alive : Tom Harrisson and His Remarkable Life*, University of Hawai'i Press (Honolulu)

Higham, Charles and Rachanie Thosarat 2012 *Early Thailand : From Prehistory to Sukhothai*, River

Books (Bangkok)

Kemperman, Jeroen・Elisabeth Broers 編　2004『日記でみる日本占領時代の蘭印：福岡に於いて書かれた日記』，オランダ戦争資料研究所 (Instituut voor Oorlogs-, Holocaust- en Genocidestudies)(Amsterdam)

Melendez, Pedro and Josephine Caccam 1967 The U. P. Department of Anthropology : 1914−1965, In M. D. Zamora and C. P. Romulo eds., *Studies in Philippine Anthropology (In Honor of H. Otley Beyer)* : pp. 6−22, Phoenix Press (Quezon)

Moremon, John 2009 *Australians on the Burma-Thailand Railway 1942−43*, 2nd ed., Department of Veterans' Affairs, Australian Government (Canberra)

Movius, Hallam L., Jr. 1944 *Early Man and Pleistocene Stratigraphy in Southern and Eastern Asia*, Papers of the Peabody Museum of American Archaeology and Ethnology Vol. 19(3), Harvard University (Cambridge)

Movius, Hallam L., Jr. 1949 *The Lower Palaeolithic Cultures of Southern and Eastern Asia*, Transactions of the American Philosophical Society, New Series Vol. 38 Pt. 4, The American Philosophical Society (Philadelphia)

Phạm, Đăng Kính・Lưu, Trần Tiêu 1973 *Những di tích của con người thời tối cổ trên đất Việt Nam : di vật của địa điểm núi Đọ tàng trữ tại Viện bảo tàng Lịch sử Việt Nam*, Viện bảo tàng Lịch sử Việt Nam (Hà Nội)

Pookajorn, Surin 1988 *Archaeological Research of the Hoabinhian Culture or Technocomplex and its Comparison with Ethnoarchaeology of the Phi Tong Luang, a Hunter-Gatherer Group of Thailand*, Verlag Archaeologica Venatoria, Institut für Urgeschichte der Universität Tübingen (Tübingen)

Rawlings, Leo 1972 *And the Dawn came up like Thunder*, Rawlings, Chapman Publications (Harpenden)［永瀬隆訳　1984『イラスト　クワイ河捕虜収容所：地獄を見たイギリス兵の記録』，現代教養文庫 1109，社会思想社（東京）］

Sarasin, Fritz 1933 Prehistoric Research in Siam, *Journal of the Siam Society* Vol. 26 (2) : pp. 171−202, The Siam Society (Bangkok)

Sieveking, Ann 1960 The Palaeolithic Industry of Kota Tampan, Perak, Northwestern Malaya, *Asian Perspectives* Vol. II (2) : pp. 91−102, Hong Kong University Press (Hong Kong)

Soejono, R. P. 1976 Hendrik Robert van Heekeren : 1902−1974, *Asian Perspectives* Vol. XVIII (2) : pp. 106−113, University Press of Hawaii, Libra Press (Hong Kong)

Sørensen, Per 1967 *Archaeological Excavations in Thailand* Vol. II, *Ban-Kao : Neolithic Settlements with Cemeteries in the Kanchanaburi Province*, Pt. 1 : *The Archaeological Material from the Burials, The Thai-Danish Prehistoric Expedition 1960−62*, Munksgaard (Copenhagen)

Tsuboi, Kiyotari 1956 17. Feng-Pi-T'ou : A Prehistoric Site in South Formosa that yielded Painted and Black Pottery, *Proceedings of the Fourth Far-Eastern Prehistory and the Anthropology Division of the Eighth Pacific Science Congresses Combined*, Pt. I : *Prehistory, Archaeology and*

Physical Anthropology (Second Fascicle : Section 1) : pp. 277–302, National Research Council of the Philippines, University of the Philippines (Quezon)

van Heekeren, H. R. 1947a Stone-Age Discoveries in Siam. *Chronica Naturae* 103 (1/2) : p. 12, Kolff (Batavia)

van Heekeren, H. R. 1947b A Romance of Archaeology : Stone Axes from the "Railroad of Death", *The Illustrated London News* 210 (5633) : p. 359, Illustrated London News Group (London)

van Heekeren, H. R. 1948 Prehistoric Discoveries in Siam, 1943–44, *Proceedings of the Prehistoric Society* Vol. 14 (2) : pp. 24–32, The Prehistoric Society, University Museum of Archaeology and Ethnology (Cambridge)

van Heekeren, H. R. 1958 *The Bronze-Iron Age of Indonesia*, Verhandelingen van het Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde, d. 22, Martinus Nijhoff (The Hague)

van Heekeren, H. R. 1972 *The Stone Age of Indonesia*, 2nd revised ed., Verhandelingen van het Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde, d. 61, Martinus Nijhoff (The Hague)

van Heekeren, H. R. 1988a Cave Explorations at Chande, Kanchanaburi Province, In Per Sørensen ed., *Archaeological Excavations in Thailand : Surface Finds and Minor Excavations,* Scandinavian Institute of Asian Studies Occasional Papers No. 1 : pp. 53–78, Curzon Press (London)

van Heekeren, H. R. 1988b The "Sawmill" Site : The Discovery and Minor Excavation of an Early-Metal Age Site in Wang Pho, Kanchanaburi Province, In Per Sørensen ed., *Archaeological Excavations in Thailand : Surface Finds and Minor Excavations,* Scandinavian Institute of Asian Studies Occasional Papers No. 1 : pp. 79–94, Curzon Press (London)

van Heekeren, H. R. and E. Knuth 1967 *Archaeological Excavations in Thailand* Vol. Ⅰ, *Sai-Yok : Stone-Age Settlements in the Kanchanaburi Province, The Thai-Danish Prehistoric Expedition 1960–62*, Munksgaard (Copenhagen)

von Koenigswald, G. H. R. 1960 Preliminary Report on a Newly-Discovered Stone Age Culture from Northern Luzon, Philippine Islands, *Asian Perspectives* Vol. II (2) : pp. 69–70, Hong Kong University Press (Hong Kong)

Zeitoun, Valery., Hubert Forestier, Michel Rasse, Prasit Auetrakulvit, Jeongmin Kim, and Chaturaporn Tiamtinkrit 2013 The Ban Don Mun Artifacts : A Chronological Reappraisal of Human Occupations in the Lampang Province of Northern Thailand, *Journal of Human Evolution*, Vol. 65 (1) : pp. 10–20, Academic Press (London)